


そして、ほかの だれの ものでも ない。 —J.

見つけても、かみなり前に開けちゃだめだよ。

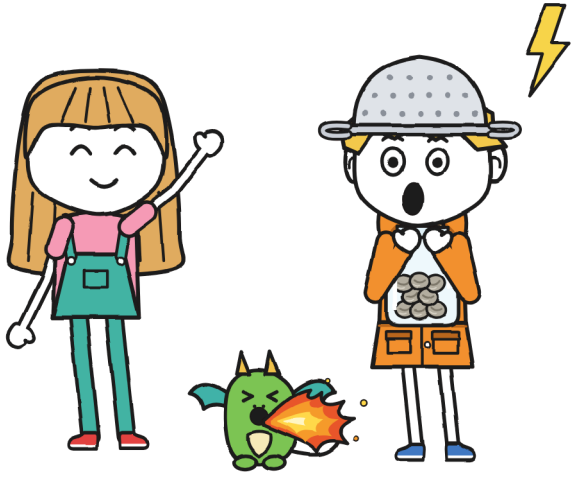
## おはなしの なかだけ

このはんこは、お話の中だけのことをしめす：きみはやらないで。何ページもつづくときは、「ここから」と「ここまで」が書いてある。本当のあらしのときは、最後のページを見て。 —J.

ありえない はいたつ・2

# かみなり まえに あけるな

Lui Eriksson



サイズ XL・イラスト小説・13+

ありえない はいたつ・2
かみなり まえに あけるな

シリーズの 2さつめ。1さつめは「このにもつは かみつく」。

文と絵：Lui Eriksson

日本語版：LinguAula

サイズ XL・イラスト小説・13+

初版：2026

© 2026 Lui Eriksson・info@linguaula.com

自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

フォント：Zen Maru Gothic、Yomogi、Zen Kurenaido、Andika、Patrick Hand、Caveat、Courier Prime（SIL OFLライセンス）。

linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

この本を書いているあいだに、けがをしたかみなりは一つもいない。 —J.



第 1 章

# あらしの ハンター

むかいの店に、ふるえている荷物がある。

先週の土曜日、荷物は一度だけ動いた。それからずっと、とまらない。細かくて、途切れないふるえ。動物病院の待合室にいる小さな犬みたいなふるえかただ。もう七日になる。日ごとに、少しずつひどくなっている。

そして、ぼくには新しいノートがある。

ノート1は使いきってしまった。「ありえない はいたつ」の店主のマラさんが、これをくれた：青い表紙で、すみに店の赤いはんこがおしてある。最初のページに、新しい言葉を一つ足して、タイトルを書いた：

グニのはいたつノート2。公式。

「公式」ってことは、わたしが先に読むってこと。公式に。 —J.

マラさんは、公式のノートに絵をかいてはいけないと言う。さあ、どうかな。このノートには、もう絵が一枚(まい)ある。

前のノートのことを、少しだけ。二週間前の土曜日の夜、フリータ（みどりのメモの人）とぼくは、おとなのつきそいなしで板の橋をわたって、何年もだれにもとどけられなかったたまごをとどけた。そのたまごが、今はパンくずだ。ぼくのまねを何でもするドラゴンの子。店の魔女(まじょ)のマラさんは、ぼくたちにばつを出した：毎週土曜日、十時に店に来ること。ぼくはこの町に来たばかりで、荷物のほとんどは、まだ箱の中だ。

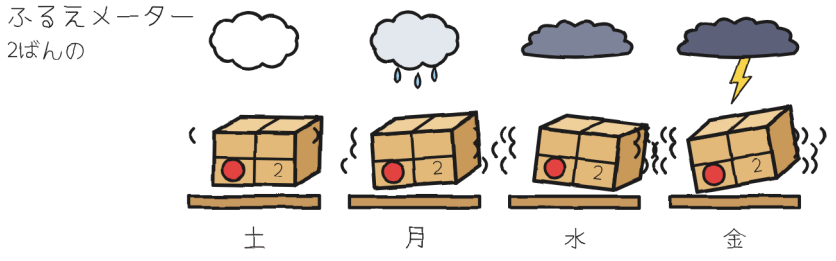
ふるえているのは、2番だ。「もどってきた荷物」の棚(たな)にあって、そのラベルを、ぼくは暗記している。今週は毎日の午後、立ったまま、さわらずに読んだ。マラさんは、ぼくが見えないふりをしていた：

- 2番。われもの。
- あてさき：フローラ、うんが通り9番地。
- ちゅうい：かみなり前にあけるな。
- さしだし人：R.

まわりには、「へんそう」のはんこが二十三こ。一つも落ちていないか、二回数えた。

「もどってきた荷物」とは、だれにもとどけられなかった荷物のことだ。うけとった人がきえないインクでサインをしないと、夜明けに、アヒルみたいに一列になって、とんで棚（たな）にもどってしまう。のこりは十九こ：かべに、みどりの字で、フリータの字で書いてある。そしてフリータがみどりで書いたものは、きえない。送っているのは、いつも同じ人、R.だ。わかっているのは、ものすごく字がきたない、ということだけ。

毎日の午後、どのくらいふるえたか、天気はどうだったかを書きとめた。そうして「2番のふるえメーター」ができた。金曜日、雲は稲光（いなびかり）を一つ、中にかかえていた。



こわくてふるえているんじゃない。あらしが来るからふるえているの。土曜日の午後六時に。天気予報は六回たしかめた。 —J.

メモを二回読んだ。二回目は、六時のところだけ。



土曜日の十時、マラさんはカウンターのうしろで、ぼくたちを待っていた。むらさき色の帽子、火花をちらして、ろうそくを消したあとのにおいがするはんこ。手には2番の荷物。棚ではなく、手の中に。はんこのとなりには、ゴムのカエルがまだいた。だれのものでもなくなったときから、ぼくのカエルだ。そしてイナズマ便の配達員のトニョが、ヘルメットをかぶったまま立っていた：土曜日は、トニョのばつの日でもある。トニョはばつも配達と同じように、時間どおりに、何もぬがずにすませる。

「二十三回、わたしが運んだ」とマラさんは言った。「でも、あらしの日は一度もなかった」

マラさんは、ラベルを親指でなぞった。ぼくはショーウィンドウを見た。空はだんだん灰色になっていく。今日の配達は、いつもとはちがう。

「これは」とマラさんは言い切った。「あなたたちがとどけるのよ。今日の午後に」

フリータはとび上がって、「のこり19」のふだにとどきそうになり、着地したときにはもうしゃべっていた。ぼくはとばなかった。ぼくの中には、二つの言葉、「今日の午後」と、一つの時間、六時が残って、荷物よりも重かった。



マラさんは三つのじょうけんを出して、指を折って数えた：

1. 五時に出る。あらしが来る前に。そして、すぎるまでフローラさんの家にいる。
2. 家族はもう知っているし、フローラさんも知っている。
3. きまりはラベルのとおり：かみなり前にはあけない。しかも頭の真上に来たかみなりでなければだめ。遠くのはノーカウント。

そのやり口には見おぼえがあった。パンくずのせわをしているベラさんにしかられたときのきまりと、ほとんど同じだ。ただし、あとからじゃなくて、先に言ってある。マラさんはその場にいなかったのに、ちゃんと知っていた：この町では、荷物より先に、おこごとがとどく。

「マラさんは行かないの？」とフリータが聞いた。

「わたしはここにやることがある」とマラさんは答えて、ショーウィンドウごしに、灰色（はいいろ）になっていく空を見た。

カウンターのはしに、たたんだもうふと、スキー用のみみあてと、小なべがあった。ぜんぶ見た。そして、荷物を見つめた。

そのとき、フリータがぼくを見た。

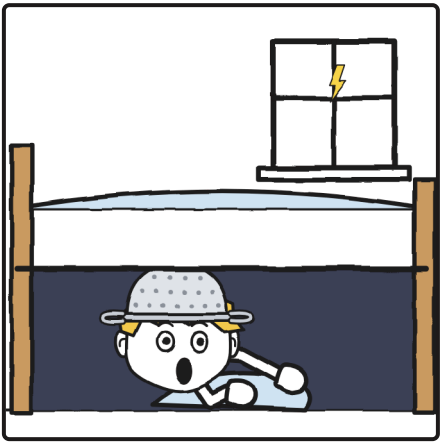
「グニは、あらしはすき？」

まっすぐぼくを見て、聞いた。本当のことを言ってもよかった。ぼくが言ったのは、これだ：

「だいすきだよ。前に住んでいた町では、プロのあらしのハンターだったんだ」

前のノートでは、うそが自分にもどってくるのに、一日と一晩（ひとばん）かかった。今回は近道をさせてあげることにした：その日の朝のうちに、うそをかいて、となりのコマに、本当のことをかいた。

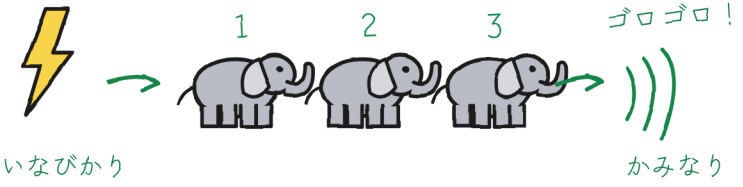




ざるは、台所のだった。ステンレスで、持ち手が二つ。かみなりは止められない。でも、頭の上に何かあると、ぼくは助かっ

た。今は引っ越しの箱のどれかに入っている。お母さんが一週間さがしているはさみのとなりに。

フリータは、ぼくのノートに、ことわりもなく、みどりのペンで、あらしの数え方を書いてくれた。




ぞう1とう、ぞう2とう、ぞう3とう……

ぞう1とう＝1びょう

ぞう3とう＝1キロ（だいたい）

ぞう0とう＝まうえ！

↖ これが ラベルの かみなり。
とおくの かみなりでは あかない。

ぞうが おおい ほど、その いなびかりは とおくに おちた。

かみなりが きこえたら、とおくても：なかへ！

数えるのは、稲光からかみなりまで、ぞうで：「ぞう1とう」でだいたい一秒、そして三とうで一キロ。そうすれば、その稲光がだいたいどのくらい遠くに落ちたかがわかる。次にどこ

に落ちるかは、わからない。数えてもわからないことがもう一つある、いつ外に出ていいか。それはフリータによると、また別のきまりで、絵はない：最後のかみなりから三十分。

小声でためしてみたら、はやすぎるぞうばかり出てきた。役に立たないやつだ。ぼくは何も数える必要がなかった、あらしはだいすきなんだから。でも、念のため、書きとめた。

トニョが、ぼくのかたごしにラベルを読んだ。自分のものじゃないものは、いつもそうやって読む。

「イナズマ便は、あらしの日にはとどけない」とトニョは言って、黄色いリュックの小さな字を見せた：イナズマ便・十分でとどかなければタダ。そして、フリータの虫めがねで見ると、星じるしがあった：*あらしのときはべつ。

「まだあらしじゃないでしょ」とフリータが言った。

トニョは、小さな字をもう一度たしかめた。「まだ」については、何も書いていなかった。

そういうわけで、トニョもついてきた。ぞうは一気に数える、「いちにさん！」と、まるで配達みたいに。トニョによると、あらしはぜんぶ一キロ先にある。勇気なのか、ぞうが足りないのか、ぼくにはわからない。

五時に、レインコートを取りに、通りをわたって家へ行った。フリータは入り口でぼくを待っていた。お母さんは、玄関でレインコートを手にぶらさげて待っていた。お母さんには、オレンジ色についての持論がある：遠くからでも目立つ、というやつだ。いったいどこから見るつもりなのか、ぼくは知らない。

「オレンジのを着ていきなさい」とお母さんは言った。「本当に行くの？ グニ、かみなりが鳴ると……」

「いってきまーす、お母さん！」

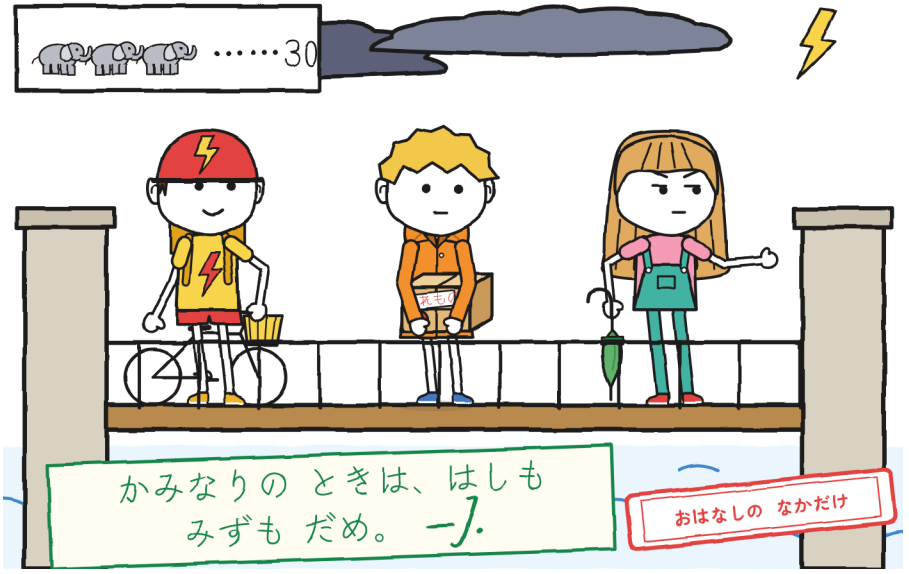
階段を二段ずつかけおりた。入り口のこだまで、お母さんの言葉の半分は、途中で消えるはずだと計算していた。消えなかった。フリータは、下にいた。

「かみなりが鳴ると……」って、なんなの？ —J.

空がどんどん黒くなっていくなか、ぼくたちは大橋をわたった。夜には船を通すために上げられる橋で、昼は、だれでもわたれる。この時間にわたっているのは、ぼくたちと、反対向きに急ぐおじさんだけ。あらしのときは、それが正しい向きだ。ぼくは2番を両手でかかえて、背すじをのばしていた。トニョ

は自転車をおして歩いた：道に迷っていないイナズマ便が、こんなにのろいのは、はじめて見た。

橋のまん中を通るとき、フリータは水に、かわいた短いあいさつをした。手をちょっと上げるだけで、わらいもせずに、きらいな相手にするように。板の橋の夜からずっとだ。それがきっとやくそくなのだと思う：フリータがあいさつして、水はフリータを通してくれる。




遠くで、空が光った。

雲のうしろのまばたき。音はなくて、自分のいない部屋の電気を、だれかがつけて、消したみたいだった。フリータはぴ

たっと立ち止まり、目をとじて、小声でぞうを数えた。何も聞こえないうちに、30とうまで数えた。ぼくもいっしょに、心の中で、はやすぎるぞうで数えたら、42とうになった。

ゴロゴロ。

「あの稲光（いなびかり）まで、十キロくらい」とフリータは見つもった。

「予報（よほう）だと、あらしは六時ごろ」

「かみなりが鳴った！」とトニョがさけんだ。「もうあけていい？」

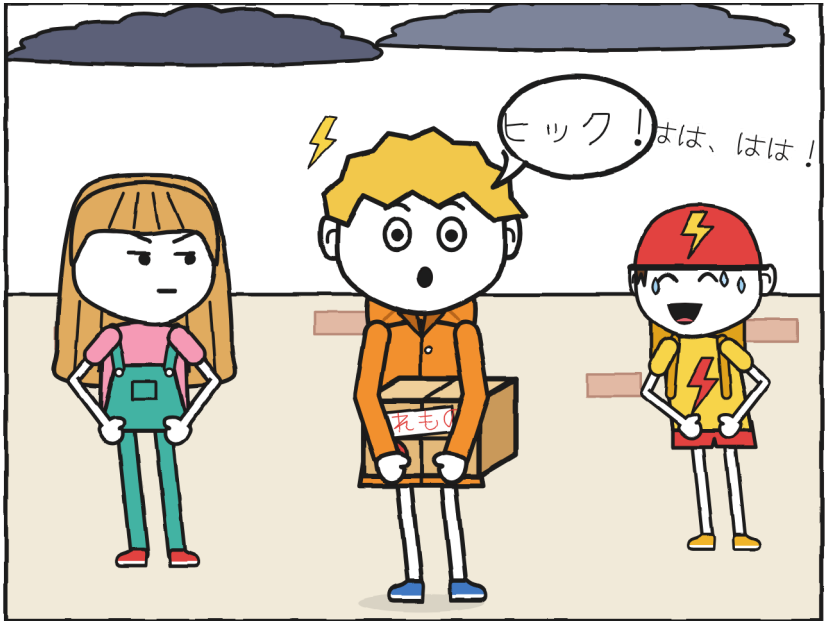
「荷物をあけるのに、あれは数えない」とフリータは、目をあけずに言った。「十キロ先だもの。ラベルのは真上のやつ：ぞう0とう。でももう聞こえてる：中にかくれよう！走って！」

ぼくは、何も聞こえなかったふりをして、うんが通りまで走った。ゴロゴロも、六時のことも。

「今の、ヒック？」とフリータは、足をゆるめずに聞いた。

「ちがう」とぼくは言った。「ヒック！」

トニョはハンドルの上で体を折って、自転車がかたむくほどわらった。フリータはわらわなかった。目をほそめた。書いていないことを読むときの顔で。




かみなりが鳴ると、ヒックが出る：小さいころからだ。あらしが遠いと、一回で終わる。真上だと、次のが来て、また次が来て、三秒ごとに、あらしが行ってしまうまでつづく。こわいんじゃない。体が、ぼくに相談もなしにやることだ。背がのびるのや、くしゃみと同じ。そして背がのびるのと同じで、どんな

顔をしてもとまらない。それは知っている。あらゆる顔でためしてみたから。

それをこわいって言うの。 —J.

うんが通りでは、赤い髪のベラさんが、ドラゴンの家の入り口で待っていた。フローラさんの家のとなりだ。パンくずをだいて。パンくずは、ぼくを見るなり、ぼくの顔をまねした：いつもそうだ。一秒ぼくを見て、ぼくがどんな顔をしているか確かめて、同じ顔をする。

2番をトニョの自転車のかごに入れて、両うでを広げた。

「はじめてのあらしなの」とベラさんは言って、パンくずをぼくのうでにのせた。「グニのまねを何でもするの。気もちまでね。おびえても、引っぱっちゃだめ：しがみつくから。すんだら、フローラさんの庭のへいを三回たたいて。すぐ迎えに来る」

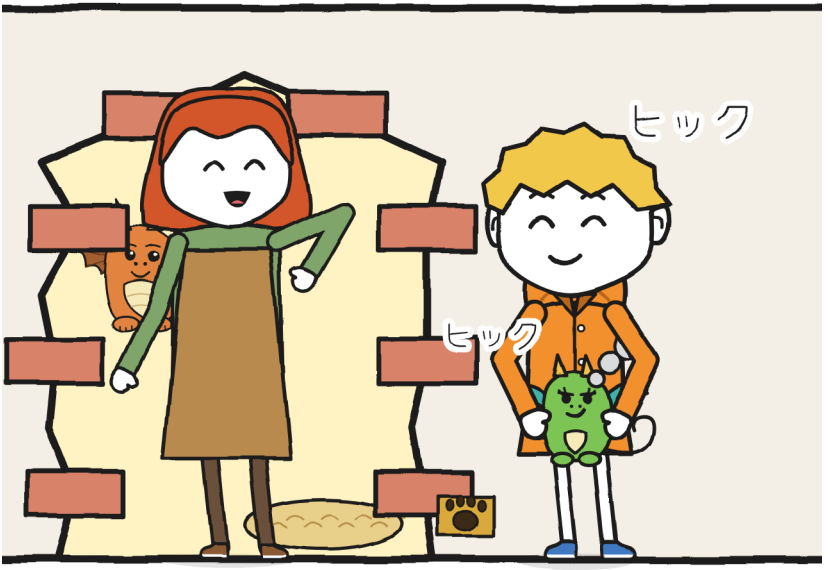
「ぼくは何も感じないよ」とぼくは答えた。「あらしはだいすきなんだ」

むねをはってそう言うと、うでの中のパンくずも、首をのばしてむねをはった：あらしがだいすきな人の見本が、大小二つ。ベラさんは、上下に重なった同じ顔の二つを見て、何も言

わなかった。ベラさんは、言葉を、必要になるときまでとっておく人だ。

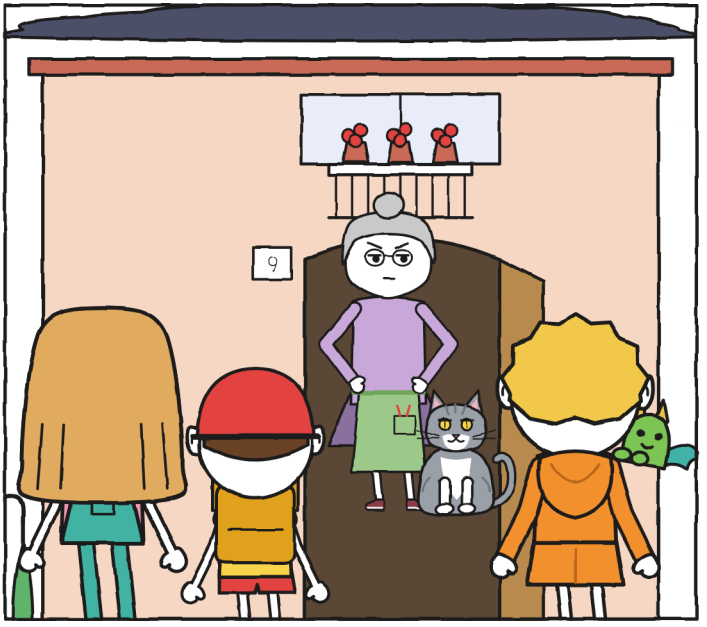
遠くで、かみなりが鳴った。ぼくはヒック。パンくずもヒックと言って、はなからけむりが出た。

「中に、早く」とベラさんはぴしゃりと言って、ぼくたちをフローラさんのドアのほうへ押(お)した。

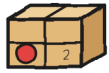



フローラさんの家はゼラニウムの家だ。二週間前の土曜日、ベランダから、じょうろを宙(ちゅう)にうかべてぼくたちを見ていた女の人の、あの家。

ドアは、ノックする前にあいた。灰色(はいいろ)のおだんごにメガネの女の人。ポケットだらけの緑の庭師(にわし)のエプロンをして、足の間には、胸(むね)の白い灰色(はいいろ)のねこ。ぼくたちを、自分あてじゃない荷物を見るような目で見た。女の人は箱を見た。空を見た。パンくずを見た。この順番で、どれにも同じだけ、つまりほんの少しだけ、時間をかけた。




「ベラのところの子ね。わたしのシダをこがさないでおくれよ」と言った。「入りなさい、雨が来るよ。でも先に言っておくけど、わたしは石にはサインしないからね」




第 2 章

# カミナリ！

フローラさんの台所は、植物でいっぱいだ：テーブルの上にも、ゆかにも、天井（てんじょう）からもぶらさがっている。植物のあいだには通り道ができていて、歩き方を知らないと通れない。パンくずがこがしてはいけないシダは、ちょうど、その鼻の高さにあった。

おくのガラスのドアは温室に通じていて、うしろの木のドアは、上にガラス、下にねこ戸がついていて、庭に出る。ガラスごしに、石だたみに雨がふりはじめるのが見えた。ぬれた土のにおいがした。公園のにおいとしては知っていたけれど、台所のにおいとしては、はじめてだ。

温室のガラスには、かいた水のつぶがあった。一つがのぼりはじめた。別の一つが、それをおいこした。

「R.のまほうのガラスさ」とフローラさんは言った。「ほしいときだけ雨を通して、稲光(いなびかり)は絶対(ぜったい)に通さない。音はいつも通っちゃうけどね、しかたない」

R.のカードのために、とっておいた：まほうのガラスは作れるのに、びんひとつ、二十三回やってもとどけられない人。

れいぞうこには、じしゃくで写真が一枚(まい)とめてあった。そして流しのわきのくぎには、フライパンとかわいたハーブのたばの間に、ステンレスのざるがかかっていた。持ち手が二つ。入ってすぐ、植物よりも先に見つけた：一週間まちがった箱をさがしていたものは、すぐ目に入るものだ。

トニョは自転車を雨よけに廊下(ろうか)に入れて、自分はその横、台所の入り口に、体を半分だけ入れて立っていた：トニョは、自分のものじゃない場所には、いつもこうして入る。ねこがトニョの足の間を通ると、トニョは、通すのに必要な以上に身をよけた。自転車にさわられたくないのだろう、と思った。

フローラさんは、箱をテーブルに置いて、植木ばちを二つひじでよけ、聞かずにあけた。聞かずに、ラベルも読まずに：何度もあけたことのある箱の、ボール紙がどこでゆるむか、知っ

ていたのだ。中には、わらにうまって、コルクせんのガラスのびんがあり、びんの中には、灰色（はいいろ）の小さな玉が八つ。

「かみなり前にはあけちゃだめって書いてある！」とフリータがさけんだ。

フリータは、ラベルを指さした。マラさんの三つ目のじょうけんは、女の人が箱のふたを持ち上げるあいだしか、もたなかった。

「今日あけたのは箱で、びんじゃないよ」とフローラさんは言った。「中に何が入っているかは、もう知ってる。R.はほおずきをくれるって言って、石をよこすの」

古い不満のような言いかただった。だれかに聞かせるためじゃなくて、言う番だから言う、というような。びんを見た。玉は灰色（はいいろ）でつるつるして、小さなクルミみたいで、石にしかないしずけさでじっとしていた。石じゃない、とは、ぼくには言えなかっただろう。ノートの、びんのとなりに、矢じるしを一本かいた：「石？」。だれかが、みどりで、もう一本足した：「ほおずき？」。

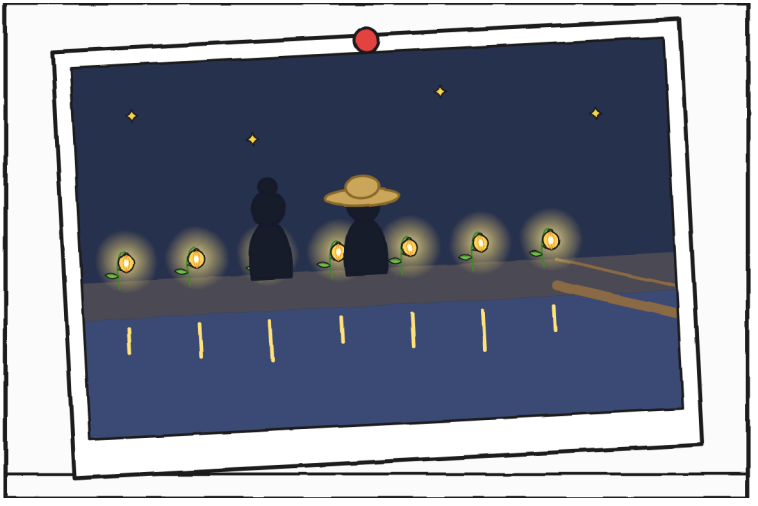
「ほおずきってなに？」とぼくは聞いた。

ぼくの知っているほおずきは、ちょうちんみたいな赤い実で、お祭りのころに店先にならぶものだった。紙のちょうちんなら、ベランダのあいだにひもでつるして、最初の雨までもつ。でも、どちらにしても、はんこつきで石を送ってくる人がいるとは思えなかった。

「イナズマ便だと、石はキロいくらで受けつけるぜ」とトニョが入り口から言った。

だれも相手にしなかった。トニョも、自分で相手にしなかった。

フローラさんはれいぞうこへ行って、写真をじしゃくからはがし、びんのとなり、ぼくたちの前のテーブルに置いた。



古い写真だった：夜のうんが沿いの道、岸には、低くて丸い小さなあかりが、一列にならんでいる。板の橋のはじまるところまで、ずっと。街灯じゃない：地面から生えていた、まるでだれかが電球をまいたみたいに。手前に、うしろ向きに、二人が何かを植えている：一人はおだんごで、そのとなりの人は、麦わら帽子が大きすぎて、下にいるのがだれか、わからない。帽子のことは聞かなかった。フローラさんも、帽子のことは言わなかった。二つのだまりのあいだに、人が一人まるごと入りそうだった。

「稲光の光をためて、夜じゅう照らす植物よ」とフローラさんは言った。「たねはR.が持ってきた、もう目ざめたのを、あらしの夜にね。わたしは土を入れた。ねむったたねなんて、見たことがない。ほおずきは、一つずつ消えていって、R.はそれきり来なくなった。今はこのびんをよこす」

フローラさんは写真をれいぞうこにもどした。曲がってしまった。指でまっすぐにして、もうしばらく、そこに立っていた。

だから運河は、あんなにくらかったのだ。板の橋のあかりは消えて、だれも二度とつけなかった。だから、あんなにこわい。

こわかった。わたしはとくに：くらやみでわたった。 —J.

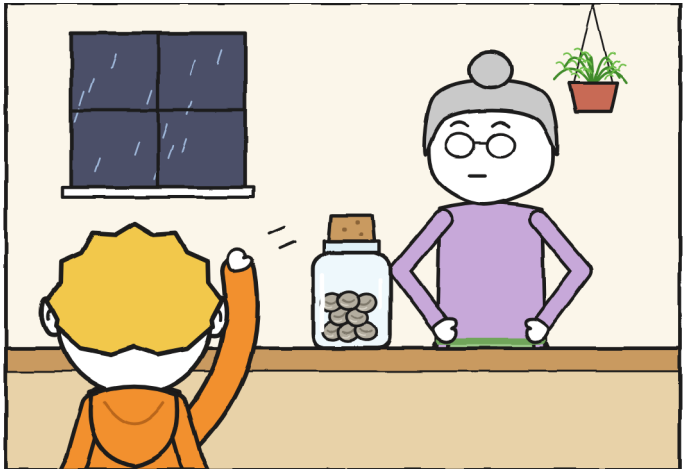
フリータはこのメモを、れいぞうこの写真から目をはなさずに書いた。板の橋は、二週間前の土曜日にぼくたちがわたった、運河（うんが）の上の板だ。フリータはうしろ向きで、ぼくは足をどこにおくか言っていた。

「R.はいつもやくそくをまもる」とフローラさんは言った。「おそいけどね。今回はまちがえた」

二つの言葉を、別のカード、のびていくリストのカードに書いた：R.についてわかっていること、似顔絵（にがお）のかわりにはてなマークが一つ。もう二行あった、どちらもノート1のもの：マラさんによると、ものすごく字がきたないこと、そしてベラさんがイニシャルを見て顔色を変えたこと。ガラスの話をふくめて、その午後に三つふえた。似顔絵（にがお）は、そのままだった。

「フローラさんは、かみなりを待ってからあけたことがありますか？」とぼくは聞いた。

フローラさんは、メガネごしにぼくを見た。ぼくは手を下ろした。なぜ質問（しつもん）するのに手を上げていたのか、自分でもわからない。



「わたしはだれも待たないよ」と言った。「かみなりだってね」

フリータは、気づかないまま、うなずいた。ぼくは気づいて、だまっていた。

フローラさんのねこは、カミナリという。青いえさ入れに、白い字で、ねこ戸のそばに書いてある。ぼくはそれをノートにうつして、えさ入れの絵をかき、あとで大事になるから、大きく書いた：カミナリ。びっくりさせられそうなものの名前は、ぜんぶ書いておく。歯のある荷物で学んだことだ。雨雲みたいに灰色(はいいろ)で、胸(むね)は白く、目は黄色い。れいぞうこのそばにねそべる

と、遠くのかみなりみたいに低く、ずっとのどを鳴らす：まだヒックが出ない種類の、遠いかみなりだ。

あらしを待つあいだ、台所では、いろいろなことが起きて、何も起きなかった。

フリータは、びんのとなりのテーブルを指でトントンたいた、コツ、コツ、コツ。天気予報（よほう）を六回たしかめて、あとは始まってほしいだけの人のリズムで。フローラさんはクッキーのかんをあけて、まん中に置いた。「めしあがれ」とは言わなかったが、わかった。トニョは、ヘルメットをぬがないまま、それをかじっていて、遠くでかみなりが鳴った、ゴロゴロと、ほとんどそうとは言えない音で。ぼくはヒック。パンくずもヒックと言って、小さな火が出て、トニョのクッキーの前を通り、きつね色に焼いた。トニョはそれを見て、においをかいで、それでも食べた。

フローラさんは、何も言わずに、用意してあったバケツの水を、パンくずのそばのゆかに置いた。そしてカミナリは、それまで、ぼくたちなんかいないふりをしていたのに、パンくずを見ると、背中（せなか）の毛をぜんぶさか立てて、ふくらんだしっぽで目の前に立ちはだかった。パンくずは、ぼくの足のうしろにかくれた。ぼくは、気づかずに、フリータのうしろにかくれた。一

列になった：ねこ一ぴき、ドラゴンの子一ぴき、男の子一人と、テーブルに指をつけた女の子一人。その子は動かなかった。

かみなりでいちばんいやなのは、待つこと。 —J.

あらしは近づいていた。まどが、黒板の色になっていくのでわかった。そして、びんでもわかった：玉は、それまで石みたいにじっとしていたのに、ガラスにあたって、チリンチリンと鳴りはじめた。細いチリンという音で、最初は雨だと思って、そのうち、ちがうとわかった。だんだん強く。まるでびんの中でも数えているみたいに。石は数えない。そう思ったけれど、言わなかった：フローラさんには、もうメガネごしに一度見られている。

フリータは小声で、稲光（いなびかり）のたびに数えた：「ぞう12とう」。「9とう」。数字が小さくなっていった。そして小さくなるたびに、テーブルの下で足がせわしなく動いて、ゆかを、何のリズムでもなく、トントンたたいた。ぼくの席から、見えた。ゆかに穴（あな）があくよ、と言うと、数えているの、と返ってきた。フリータに、足が動いてるよと言える人はいない。

そのときパンくずが、また小さな火を出した。ヒックなしに、緊張のあまり。すると、手のひらひとつぶんのところにいたカミナリが、ねこ戸から庭へ、雨の中へととび出した。ふたのような音がした：パタン。フローラさんは、うしろのドアをぐいと引きあけて、戸口から大声で呼んだ。あるだけの声で、それはとても大きい：

「カミナリーーー！」




だれかに聞かれたら、フリータの手は、さけび声より先に、もうせんにかかっていた。だれも聞かなかった。

そしてフリータが、びんをあけた。

ポン！

小さくて丸い、コルクの音だった。台所では、半秒のあいだ、ほかに何も聞こえなかったから、はっきり聞こえた。フリータは、きまりを一字一句（いちじいっく）まもったという顔で、せんを持ち上げた。

「かみなりが鳴った！」とフリータは言った。

かみなりは鳴っていなかった。さけんだのはフローラさんだ。カミナリはねこの名前なのだ。

ところで、ぼくはヒックをした。かみなりが鳴ったからじゃない：だれかがぼくの二メートル先で「カミナリ」とさけんだからで、ぼくの体は区別がつかない。パンくずは火つきのヒックをして、トニョは両手で耳をふさいだ、おそいけど。

ねこのことは、少し前に、ぼくがえさ入れの絵のとなりに、白い字のとおりに、はっきりとうつしておいた。

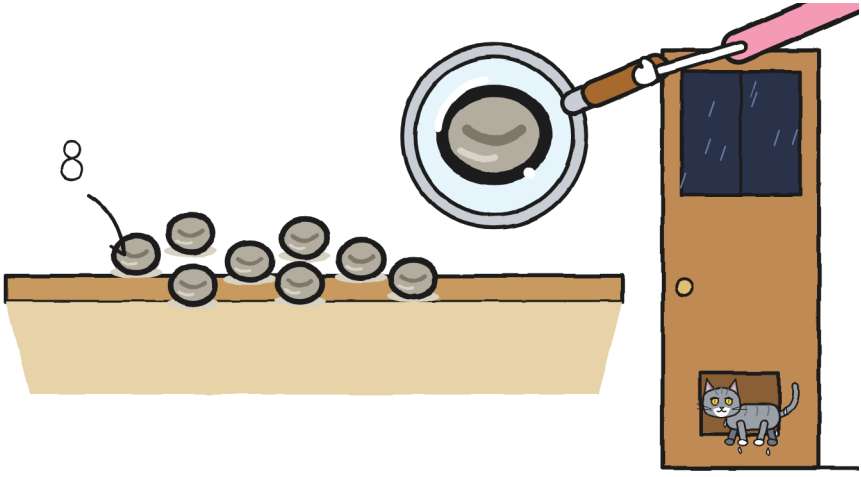
そのページはあとで読んだ。 —J.

びんの中には、灰色（はいいろ）の玉が八つあるだけで、つめたくて、動かない。何も光らず、何もはねず、チリンとも鳴らなかった。フリータは、一度でめげる子じゃないので、玉をそっとテーブ

ルに出して、オーバーオールのポケットから虫めがねを取り出した。ぼくは指で数えた：八つ。何をしたらいいかわからないとき、ぼくがすること。数える。

「すじがあるね」とフリータは言った。「とじた目みたい」

虫めがねを借りてのぞいた。どの玉にも、細い、曲がった線があった。まぶたみたいだった。



カミナリは、ひとりでねこ戸からもどってきた。びしょぬれで、毛がはりついて、半分の大きさになって、パンくずのバケツの上でブルッと体をふるった。バケツはもういっぱいだった。フローラさんは、うしろのドアをしめ、エプロンで手をふいて、テーブルを見た。

「石だね」と言った。「そして、かみなりの前にだれかがびんをあけた」

フリータを見ずに言った。見る必要はなかった。フリータの顔は、シャツと同じ、ピンク色になった。そして虫めがねをポケットに、ものすごくゆっくりしまった：ゆっくりしまえば、何もあけなかったことになる、とでもいうように。

ぼくは植物にくわしくない。わたの上で豆を一つ育てたことがあるけれど、引っ越しをこえられなかった。でもフローラさんは「ねむったたねは見たことがない」と言ったし、ぼくは、あのとじた小さな線のことが、頭をはなれなかった。

「ねむってるんだ」とぼくは言った。「石じゃなくて、たねだよ。だから『かみなり前にあけるな』って書いてある。もしかしたら、かみなりが起こしてくれる。ガラスがふるえるくらい大きいやつが」

ねむっているたねは、計画をもった石だ。

フローラさんは、台所に来てからはじめて、すわった。玉を見た。それから言った：

「たねなら、しょうめいしてみなさい」

外はもう夜みたいだった。六時だった。フリータが、六回たしかめた時間だ。



稲光（いなびかり）が、すべてを白くした。

前ぶれはなかった。ついさっきまで、台所は台所だった：植物とれいぞうこと、ぬれたねこと。つぎの瞬間（しゅんかん）は、台所の白黒の絵だった：一枚（まい）ずつ切りぬかれた葉、かべにはりついた、みんなの影（かげ）、光のページになったまど。フリータが数えようとロをあけたが、「ぞう1と……」までしか言えなかった。

そして、本物が来た。

かみなりは、稲光（いなびかり）と同時に来た：あらしは、真上にいた。音じゃなかった。ひと押（お）しだった。テーブルも、コップも、ガラスもふるえて、ぼくの中でも何かがふるえた、ぞうの図には出てこない何かが。ぞう0とう。真上。

そして、でんきがきえた。

すっかり消えた。れいぞうこがうなるのをやめる、あのカチッという音がして、台所は、とじた箱の底みたいに、まっ黒になった。あるのは目だけだった：ぼくの目、開きすぎている

のがわかる目、みんなの目、そしてぼくのブーツにくっついた二つの黄色い目。だれも何も言わなかった。ガラスに雨の音がして、ずっと下のほうで、小さくて速い息づかいが、ぼくのと同じリズムでつづいていた。

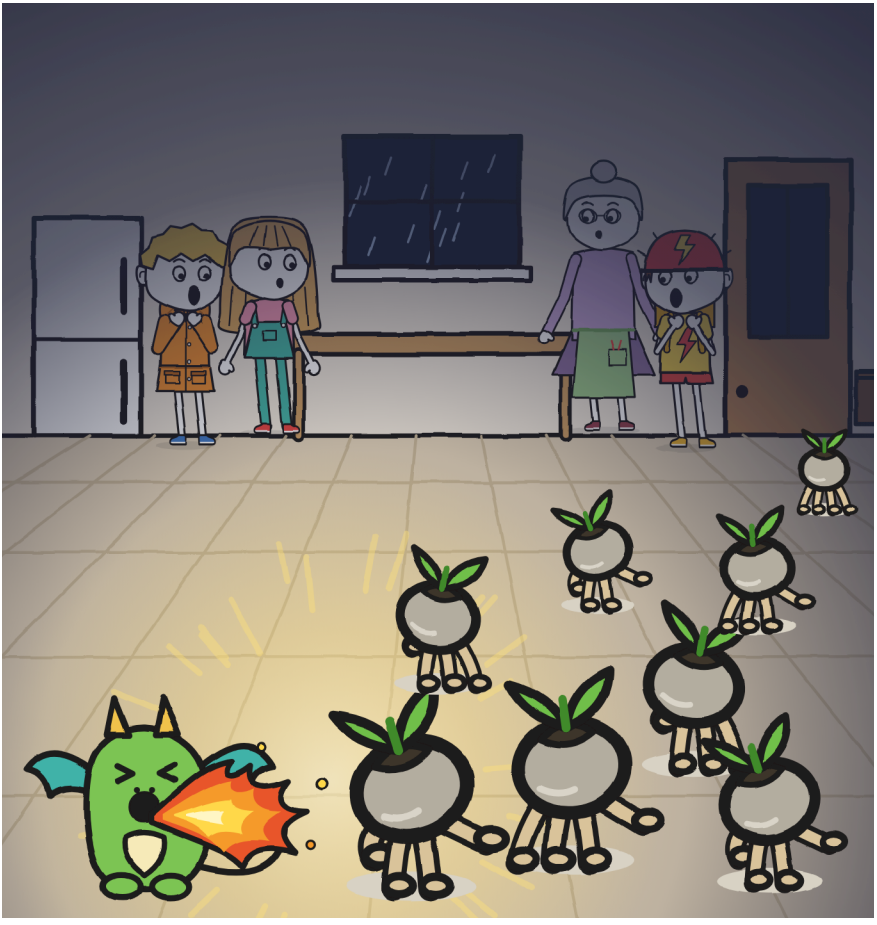


ぼくはヒック。

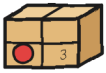
パンくずもヒックと言って、ボウッと大きな火が出た。

一秒のあいだ、台所ぜんぶが見えた。

テーブルはからっぽだった。



石に足があった。



第 3 章

# みないと うごく

くらやみの中で、小さな雨の音がした：トト、トト、トト。外の雨は、落ちていた。こっちのは、ゆかを走っていた。

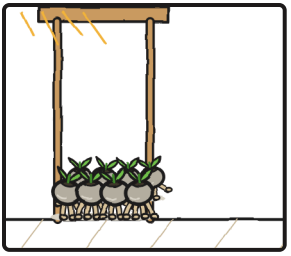
稲光（いなびかり）。

たねは、さっきより遠くにいた。じっとして、四本の小さな足と、二枚（まい）の葉をつけて。一つは、足を一本、宙（ちゅう）にうかせたままだった。お母さんに「だれがさわったの？」と聞かれたときのぼくと、同じ顔をしていた。

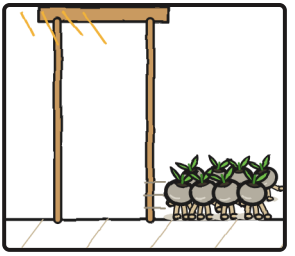
また、くらやみ：トト、トト、トト。

ぼくはヒック。パンくずもヒック。その火が、たね三つを、一歩の途中（とちゅう）でとらえた。ほかのは走りつづけた。

だるまさんがころんだ。たねで。 ―J.





フローラさんがライトをつけた。たねの一つに向けて、くぎづけにした。別のに向けた。最初のがにげた。

「たねだ！ 目ざめてる！」

おこった声を出すのを、忘(わす)れていた。

「だから言ったんだ」とぼくはつぶやいた。

「だったら、行かせないように手つだっておくれ」

フリータはかがんだ。まだ片手(かた)にせんを持っていた。それをオーバーオールにしまって、あいた手をたねの前に広げた。

指一本ぶんの差で、はずれた。

次の稲光(いなびかり)で、どこへ行くのかがわかった：みんな、ねこ戸だ。

フローラさんは、大きな植木ばちを引きずってきて、道をふさいだ。

「あらしのぬれた土をさがしているんだよ。ここにあるのは水道の水の土だけ。外には、土がほとんどない：石だたみと小道と、運河（うんが）。出たら、雨で水にながされる」

ガラスごしに見た。ひもみたいな四本足のたねは、外では、水たまりの中の紙くらいしかもたないだろう。

ねこ戸はふさがった。でも、たねは台所じゅうにちらばって、くらやみで、しかも台所にはかくれる場所が百もある：れいぞうこの下、バケツのうしろ、植木ばちのあいだ、じょうろの中、そしてテーブルの下。そこにぼくがいた、フローラさんのざるをかぶって。うちでも、かみなりが鳴るとかぶる。このざるは、流しのわきのくぎにかかっていて、ぼくの両手が、勝手にはずしていた。

あらゆることをやってみた：

1. フリータは、ぬのをたねにほうって、その上にとびかかり、ぬのをめくると、下にいたのは……カミナリだった。ニャーオ！ ねこがどこからでも出てくるように、ぬのの下から出てきた：ものすごくおこって、それも、もっともな話だ。
2. トニョは、いすの下を、四つんばいでたねを追いかけた。すると、配達員を知らないカミナリが、トニョの背中（せなか）にとびのって、そのまま、旅が気に入ったようすで乗っていた。どいて！
3. ぼくは、テーブルの下で、ヒック。パンくずもヒックで、その火が、たねを一つ、フリータの手から手のひらふたつぶんのところでとめた。フリータがつかまえた。「ひとつ！」
4. フローラさんは、別のたねにライトをあてて、ゆかに落ちたスモモをひろうみたいに落ち着いて、拾い上げた。「ふたつ！」

カミナリもたねを追いかけた。くらやみでも、ほとんど見える。ぼくたちは、見えない。ほかの全員がいすにつまずいて、手さぐりでごめんなさいと言いあっているあいだ、カミナリ

は、何にもさわらずにまん中を通りぬけて、別のリーグでやっているのが、はっきりわかった。

トニョは、あらしはこわくない。トニョがこわいのは、ねこだ。

それがわかったのは、カミナリがトニョの背中（せなか）からおりたとき、ほっとするかわりに、トニョがいすにとび乗って、そこにつっ立ったからだ。ヘルメットをかぶって、足をできるだけゆかから遠くにして。カミナリは、その下にすわりこんで、ショーウィンドウを見るみたいに、トニョをながめた。



「ねこじゃないって！」とフリータが言った。「カミナリだよ！」

「もっとこわい！」

わらわずに書く。わらう資格（しかく）はないから。トニョのこわいものは、いすの上にのっていて、みんなに見えている。ぼくのは、テーブルの下で、ざるをかぶっていた。

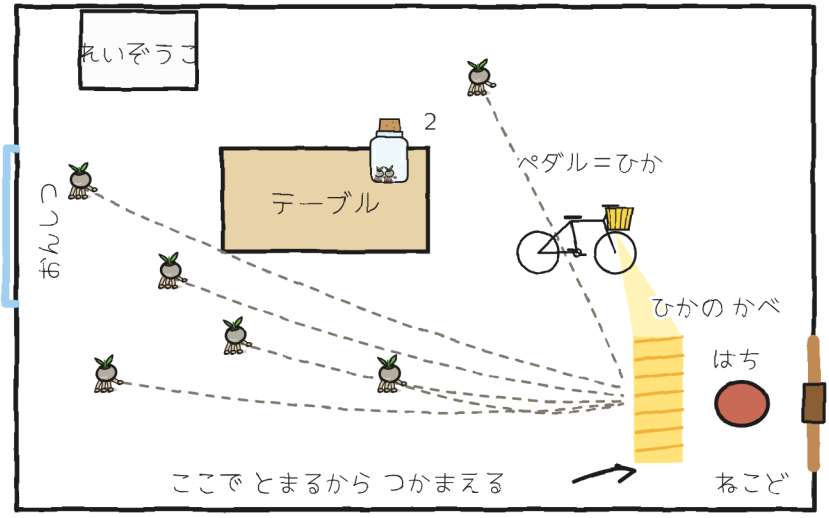
テーブルの下のプロだね。 —J.



そこからは、稲光（いなびかり）のたびに、ゆか全体が見えた。たねは、いすのあいだを回っていたけれど、いつも、ねこ戸のはちをおしにもどってきた。強くおすわけじゃない。でも、いつも、おしていた。

そこで、地図をかいた。

稲光（いなびかり）ごとに一本ずつ線を引いて、ノートをひざにのせてかいた：ぼくが急いで考えるための、たった一つのやり方だ。そんな地図は、線がゆがむけれど、矢じるしはみんな同じ場所を向いていて、それが大事だった。ねこ戸の前に、「光のかべ」をかき、そのとなりに、自転車をかいた：「ペダル＝光」。




「トニョ、自転車のライトは、ペダルをこぐとつく？」

「もちろん」

「じゃあ、今日は光をはいたつして」

フローラさんは、地図をライトでてらした。フリータは、テーブルクロスの下からのぞいた。トニョは、いすからおりた：自転車のためなら、どこからでもおりる。

自転車をスタンドで立てて、ライトをねこ戸に向けた。イナズマ便のダイナモは、後ろの車輪にぴったりついていて、回れば光る。そしてトニョがこいだ。

トニョは、いままでこいだことがないくらいはやくこいだ。とくに、カミナリが上にとびのったときは。

見てもらわないとわからないから、かいた。




どこへも行かない自転車を、できれば遠くにいたかった人がこいでいる。光はライトから出て、最初は黄色くふらつき、やがて白くまっすぐになって、ねこ戸の前に、かべみたいに立った。ぼくの「光のかべ」が、現実（げんじつ）に、あせの玉つきで。

たねは光まで来ると、じっとした。ぼくたちは、一つずつつかまえて、びんに入れていった。三つ。四つ。

テーブルの下から出て、フリータのとなり、光のふちに四つんばいになった。たねは、線をふむと止まった。ビー玉より少し重いくらいだった。指を、すばやくとじなければならなかった：かげがふれたとたん、また走ろうとするのだ。

カミナリも一つ、口でつかまえて、フローラさんが、指二本で取り上げた。

「五つ！」とフローラさんは言った。

六つ。

フリータがポケットからせんを出し、フローラさんがびんにふたをして、六つが考えなおさないように、コルクをしっかり押しこんだ。それから、かがんで手つだってくれた。そのとき、カミナリがテーブルにとびのって、びんをたおした。

目のはしで、とてもゆっくり、落ちるのが見えた：びんが、コルクのせんをつけたまま、空中でまるまる一回転する。そして、トニョがペダルをはなし、ゴールキーパーみたいに体をのばして自転車からとび出し、ゆかから手のひらひとつぶんのところで、両手をとじるのが見えた。ガシャン！

「イナズマ便」と、トニョはタイルにねそべって、びんを高くかかげて言った。「一秒でとどかなければタダ」

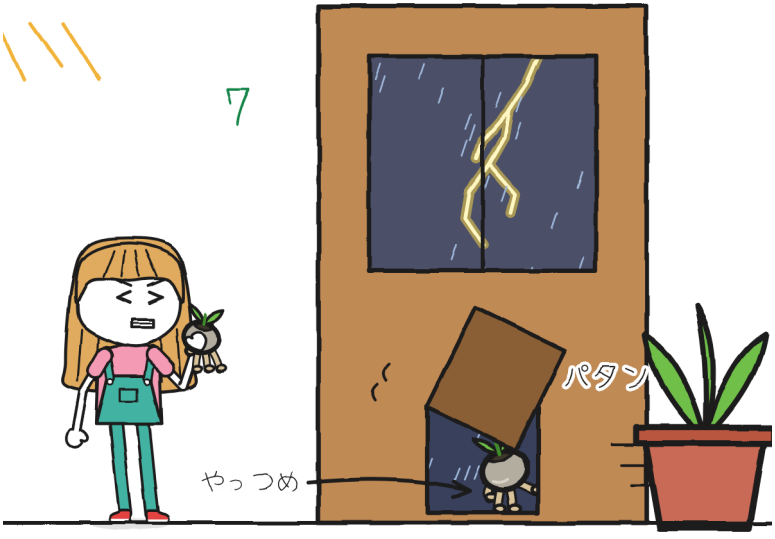



人生で見た、いちばん速い配達だった。ここ、ノートの中では、認(みと)める。声に出しては言えなかった：出たのは、ヒックだった。

でも、ペダルをやめたので、光は消えた。そしてカミナリは、だれにも止められない：ねこ戸へまっしぐらだ。

くらやみの中：トト、トト、トト。それから、ゴトッ：ねこが出たくて動かした、はち。パタン：ねこ戸。そしてそのあとを、すごい速さで、もう一つ、トト、トト、トト。カミナリじゃない音が。

また稲光が光ったとき、ゆかにのこっていたたねは一つだけで、フリータがつかまえた。フローラさんは、入るぶんだけびんをあけて、またコルクを押しこんだ。七つ。

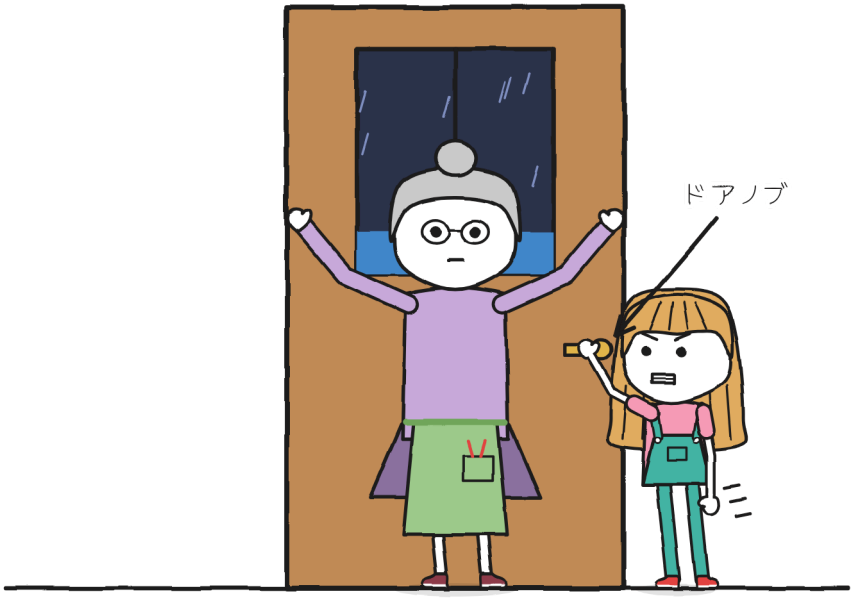



同じ稲光で、ドアのガラスごしに、雨にぬれて光る庭の石だたみと、小道と、小道のまん中に、一歩の途中で止まった、ちっぽけなたねが見えた。小さな葉が、水でおれていた。それから、また夜になった。そして次の稲光では、小道には何もなかった。

八つめは、ねこ戸から出ていってしまっていた。

「取りに行く！」とフリータは、もうドアノブに手をかけて言った。

「稲光（いなびかり）が落ちるときは、この家からだれも出さないよ」とフローラさんはきっぱり言った。話し合うつもりはなさそうだった。




フローラさんは、ガラスに背（せ）を向け、両うでを広げて、ドアの前に立ちふさがった。フリータは、その肩（かた）ごしに見た：小道、運河（うんが）、雨。あごをかたくした。

フリータは言いかえさなかった。でも、ドアノブもはなさなかった。

しばらくして、ねこ戸がパタン。カミナリだった、二度目のびしょぬれで、毛がはりついて、一度も植木ばちを動かしたことなんかない、という顔をして。一ぴきだった。八つめは、なし。フローラさんは、念のため、また足ではちをねこ戸のほうへ押(お)しもどし、カミナリはテーブルの下にすわった。あらしがぼくたちだけのことであるみたいに。

しばらくのあいだ、だれも何も言わなかった。ぼくだけが、言っていたのは、ヒックだった。外で、空がまた光った。

「稲光(いなびかり)……ぞう1とう、ぞう2とう」

ゴロゴロ。

「2とう」とフリータは数えた。「まだ、すぐ近く」

ドアノブに手をかけたまま、ぼくたちじゃなくて、ドアを見て言った。ぞう2とうは、一キロより近い。一時間前までなら、ぼくにとって、それは今夜いちばんの悪いニュースだった。今は、二番目だった。

「じゃあ、今から植えよう」とフローラさんは言った。「あらしが行ってしまう前に。それも、くらやみで」

「稲光の中で？」とフリータは、ドアノブをはなさずに聞いた。

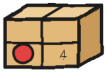
フローラさんは、温室のガラスをのぼる水のつぶを指さした。

「まほうはまだ効いている。稲光は外にのこる。わたしたちは中に」

びんを見た。中にはたねが七つ。足をガラスにくっつけているのもいて、まるで測っているみたいだった。ガラスには、稲光のたびに、そのうつりがふるえていた。八つのうち七つ。ものを数えるぼくは、その数字にこだわった：八じゃない、でもゼロでもない。あの夜のぼくには、七つあれば、始められるように思えた。

「くらやみで」とフローラさんはくり返して、パンくずを見た。

そしてパンくずは、ぼくを見て、ヒックをした。




第 4 章

# ヒック

フローラさんが、ほおずきの植え方を説明してくれた。R.に教わったとおりに。ぼくはサインペンをぎゅっとにぎって書きとめた：四つの手順で、いちばん大事なのは最後の、時間のきまりだった。

ぞう10とうまでは、目ざめている。11とうからは、ねむる。 —J.

つまり、時間のきまりは二つ：たねには、ぞう10とう。ぼくたちには、最後のかみなりから三十分。

フローラさんは、ぼくが書くあいだ、ノートをライトで照らしてくれた。手順は、そらで言った。R.のことは、もう何も聞かなかった。

ほおずきの うえかた

1. 

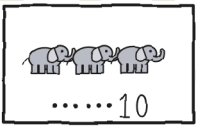
あらしの ぬれた つち。
（みずみちの みずの つちは だめ）

2. 

つちの うえで びんを あける。
（その まえに あけると、にげる）

3. 

ぜんぶ くらやみで：たねは ひとりで つちに もぐる。
（じぶんで うめると、めが でない）

4. 


あらしが すぎる まえに：
ぞうが 10とうより おおいと、
つぎの あらしまで もう うわらない。

手順の2と3のあいだに、ヒックを二回した。パンくずは、火を二回。台所は、フラッシュみたいに二回光った。だれも何も言わなかった。そのころには、パンくずとぼくは、この家の照明係になっていた。カミナリはテーブルの下で、手順が自分のためのものであるかのように、聞いていた。

フローラさんは、温室のガラスのドアをあけて、先に入った。パンくずは、ぼくのブーツにぴったりついていた。そう思っていた。

温室は台所につながっている。細長くて、かべには植木ばちの棚、まん中には花だん、土のいっぱい入った長いテーブルで、その下にも、はちがある。昼間は、緑で静かな場所なのだろう。夜は、あらしのとき、稲光のたびに、天井ぜんたいが白くなった。

天井には、絶対にあかない窓がある。フローラさんが、そのハンドルを回した：窓はしまったままだったけれど、かいた水のつぶが、のぼるのをやめて、ガラスを下へおりはじめた。すると本物の雨がそこを通りぬけて、花だんの土にふった。

「ぜんぶ花だんへ。ゆかには一てきもだめ」とフローラさんは、雨が自分のものであるかのように命じた。

すぐに、水をまいたばかりの土のにおいがした。

このガラスはお話の中だけ。本当のあらしでは、温室にはぜったい入らない。最後のページを見て。 —J.

「あらしのぬれた土よ」とフローラさんは言った。「さあ、ぜんぶくらやみで。そして急いで」

フリータは、びんを両手にかかえて、入り口に立ちどまっていた。ドアノブをびんにかえて、同じ力でにぎっていた。




そのとき、植木ばちのぶつかる音がして、花だんの下のおくに、黄色い目が二つ、ふるえる羽が二つ、そして三秒ごとに小さな火が見えた。ヒック。パンくずは、もう中にいた：ドアをあけたとき、フローラさんの足の間をすりぬけていたのだ。

フローラさんはそっと引っぱった。パンくずは、四本の足で植木ばちにしがみついた。

植木ばちにしがみついたドラゴンの子は、とつぜん、植木ばち二つぶんの重さになる。そして、雑草（ざっそう）をことわりなしにぬく人であるフローラさんは、手をはなして、ひざをついて、パンくずを見つめた。

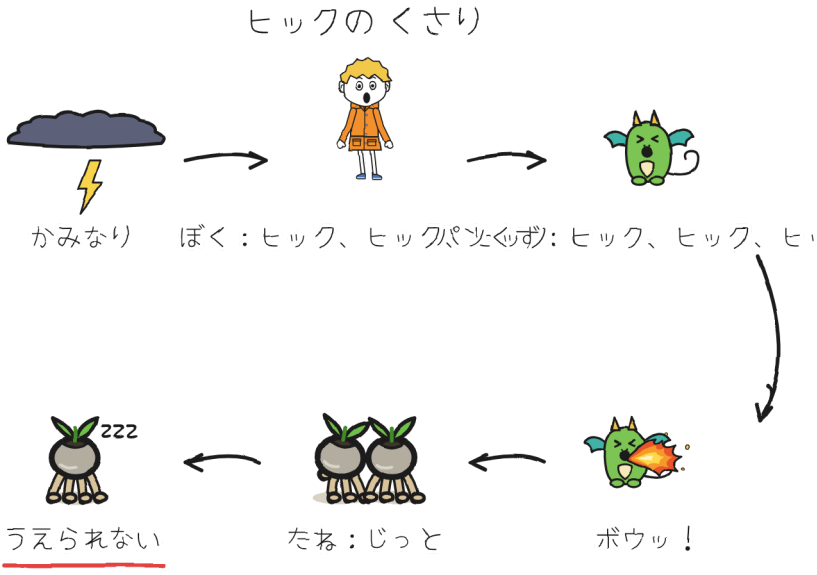
ベラさんは言ってたよ。わたしは聞いた。あなたは、むねをはっていた。 —J.

そしてぼくが台所でヒックをするたびに、温室ではパンくずが光った：ドアのむこうで、植木ばちが下から照らされる。ヒック：ぴかっ。ヒック：ぴかっ。れいぞうこの明かりみたいに、ただ、ドアはぼくで、ぼくは自分をしめられなかった。

台所では、ヒックが助けになった：火、じっとするたね、つかまるたね。そこでは、植えるのをじゃました。三秒ごとの火では、たねがもぐるのに必要なだけ、くらい時間が、一度もない。かみなりとパンくずのあいだに、ざるをかぶったぼくが、いた。

わかるようにかいた。

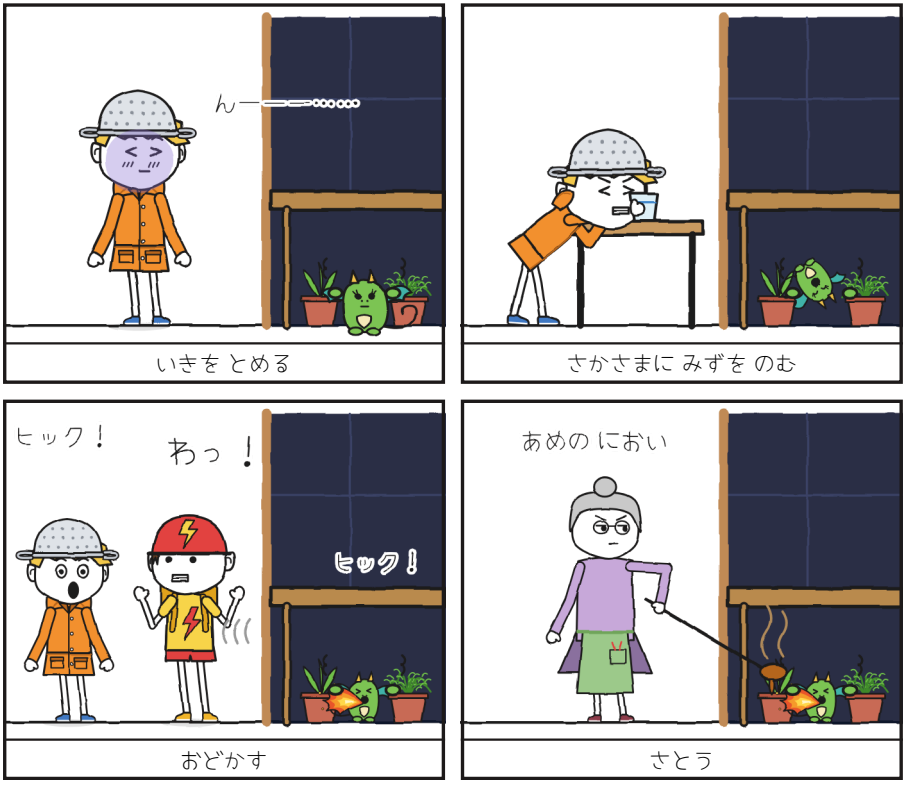
しゃっくりのおまじないを、ぜんぶためした。パンくずがお手伝いで：パンくずはおまじないをまねして、おまけに、ヒックもまねした。




くさりを切らなきゃ。いちばんかんたんな輪はあなた。あいをこめて。 —J.

いきを止める：ぼくは紫色（むらさき）になって、パンくずは、もっとみどりになった。水をさかさまに飲む：鼻に水が入った。おどかすのは、トニョの担当（たんとう）で、トニョは前ぶれなしに「わっ！」とさけんだ：おどろいたのはぼくで、ヒックは同じように出て、パンくずの火が、トニョのヘルメットの稲妻（いなずま）をこがした。最後は、さとうをスプーンに一ぱい、フローラさんの考えだ：パン

くずのは、口にとどく前にあめになって、温室は、しばらくお祭りのにおいがした。




「ぞう4とう。5とう」

かみなりが鳴った。歯をくいしばった。ヒック。

「あの稲光（いなびかり）は、さっきより遠くに落ちた」とフリータが言った。

七つのたねは、びんの中でぐるぐる回っていた。たねも出口を見つけられず、ぼくもだまる方法を見つけられなかった。

「10まで」とぼくは言った。「まだ、間に合う」

次の稲光（いなびかり）で、トニョが、はやく数えはじめた。

「それじゃだめ」とフリータが言った。

トニョは口をとじた。フローラさんは、ライトを消して待っていた。急げとは言わなかった。それが、ほとんど、もっときつかった。

「パンくずは、グニのこわさをまねしているの」とフリータが言った。

「ほかのものをまねしてくれればいいのに」とぼくは言った。

ヒック。ボウッ。

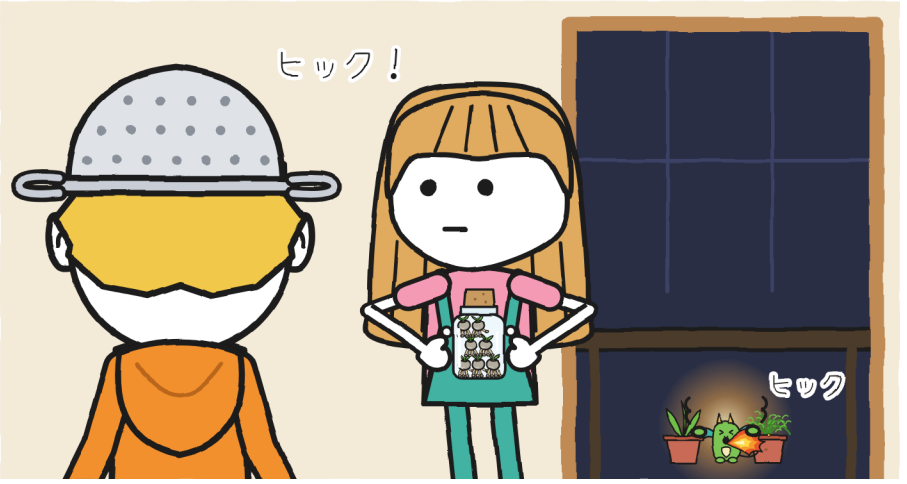
「台所に出してあげたら？」とぼくは聞いた。

「しがみつくよ。見たでしょ」

温室のドアを見た。前よりずっと遠くにあるように見えた。

フリータは声をひそめた。

「まず、そばにいてあげて」




ぼくには、プランがあった。困(こま)ったのは、それがこういうときの役に立たないことだった。

ぼくのプラン：かみなりがこわいとばれないように：

1. あらしがだいすきと言う。
2. ヒックをしない。
3. ???

2番目は、その夜のヒックのたびに線を引いて、読めなくなるまで消した。1番目はまだ生きていたけれど、もうだれも信じていなかった。ぼくも。

3は？ ―J.

ためした。ほんとうに。

入り口に近づいた。フリータは、びんを持ったまま、ぼくの場所をあけてくれた。だれも押さなかった。

温室に、片足を入れた。ざるをかぶって、片手をドアのわくにかけて、決意をこめて。足は、ちゃんと入った。五月のプールに入る足みたいに：足は、入った。のこりは、あとで考える。

稲光が、天井ぜんたいを白くした。思わず数えた：ぞう5とう。

ゴロゴロ！

まほうのガラスは、音を止めてくれなかった。天井ぜんたいが、太鼓みたいにひびいた。ヒック！ 花だんの下で：ヒック！ そして、ボウッ。

次にわかっているのは、また台所にいて、れいぞうこにはりつき、ざるをまゆげまでかぶっていたことだ。歩いた覚えはない。ぼくの足は、手と同じで、勝手な習慣をもっている。

れいぞうこにはりついたまま、手は冷たく、心臓は耳の中にあった。頭から指二本ぶんのところに、あの道の写真があった：あかりの列。それを、今は、ヒックでぼくが消している。



入り口から、ガラスの天井を見上げた。そして、稲光と稲光のあいだに、見えた：ベラさんのドラゴンたちが、あらしの中をとんでいる。

四ひきいた。大きいのが三びき、青、オレンジ、むらさき。稲光のあいだを、稲光が舞台のライトであるかのように、横ぎっていく。その間に、四ひきめの、赤い、小さいのが。屋根よりずっと高く、あらしの中、いちばんかみなりが鳴るところを、少しも急がずにとんでいた。稲光が一ぴきずつ、うろこ一まいまで、白くうかび上がらせる。それが消えると、天井にふる雨が影でとぎれるので、まだそこにいるとわかった。

だからベラさんは、いっしょに来なかった：あらしのときは、ドラゴンたちがとびに出て、ベラさんは、もどるまで家で

見守る。ドラゴンたちを見て、それから花だんを見た。パンくずも、いつかはあの中でとぶだろう。その夜は、植木ばちのあいだで丸くなって、ぼくをまねしていた。



ドラゴンたちは、ヒックをしていなかった。

「行こう、あらしのハンター」とトニョが言った。

冗談を待った。来なかった。トニョは、ぼくの肩に手を置いた。

ざるをぬいで、フローラさんにわたした。

フローラさんは、ざるを両手で持って、ほんもののヘルメットをあつかうように、大切にした。ぼくは、ぺしゃんこの髪に手をやった。頭は、前と同じ重さだった。

そして、ぼくは入った。



中では、雨が、千本のゆびでいっせいにたたくような音を立てていた。四つんばいで、花だんの下にもぐった。パンくずはそこにいた、まるくなって、ぼくと同じようにふるえて。

ぬれた土のにおいがした。そばにしゃがんで、ひざをかかえた。ぼくはおなかからふるえて、パンくずは、羽から。二人で、植木ばちをふるわせた。

数えようとした。「ぞう1とう、ヒック、2と……、ヒック」。ヒックがぞうのあいだにわりこんで、数がわからなくなった。

出ようと思った。足は、もう動きはじめていた。

パンくずが、四本の足で、植木ばちをおさえた。

ぼくは、のこった。

ゴロゴロ！ ぼくはヒック。パンくずもヒック。火が、ぼくたち二人を照らした。

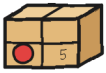
ぼくと同じ顔をしていた。うろこつきで。

ぼくたちは、花だんの下の、あらしのハンター二人だった。

そのとき、入り口から、フリータが小さな声で、わらわずに言った：




「かぞえよう。わたしがいる」




第５章

# かぞえよう、わたしがいる

そして、ぼくたちは数えた。フリータは入り口から、ぼくは花だんの下で、しゃがんで、パンくずがぼくのレインコートにふるえてくっついていた。

稲光（いなびかり）。

「ぞう1とう。2とう。3とう。4とう。5とう。6とう」

ゴロゴロ。

「6とうなら、二キロくらいね」とフリータは言った。「あの稲光（いなびかり）は、さっきより遠くに落ちた。このまま中にいよう」

今度は、かみなりが6とうめに来たとわかっていた。数えなければ、ただのかみなりが一つふえただけだった。数えることが、待つあいだにすることを、ぼくにくれた。

パンくずは、ぼくのレインコートにくっついて、ふるえつづけていた。

もう、ざるはためした。水も。温室を出るのも。もう一度入るのも。



「かみなりがこわいんだ」

花だんのはちに向かって言った。フリータには、それでも聞こえた。

「知ってる。今朝（けさ）、かいてたでしょ、あらしのハンターだって言ったとき。待っていたの」

フリータは、パンくずがぼくのこわさをまねしていると、もう言っていた。ぼくは、なおすものをほかにさがしていた：ヒック、植木ばち、ドア。

今度は、「でも」と言わなかった。

声に出して、ありがとうとは言わなかった。ここに、おいておく。

読んだ。どういたしまして。 —J.

「おれはねこがこわい」とトニョが言った。

カミナリは、トニョのひざでねむっていた。トニョは、手を動かさなかった。

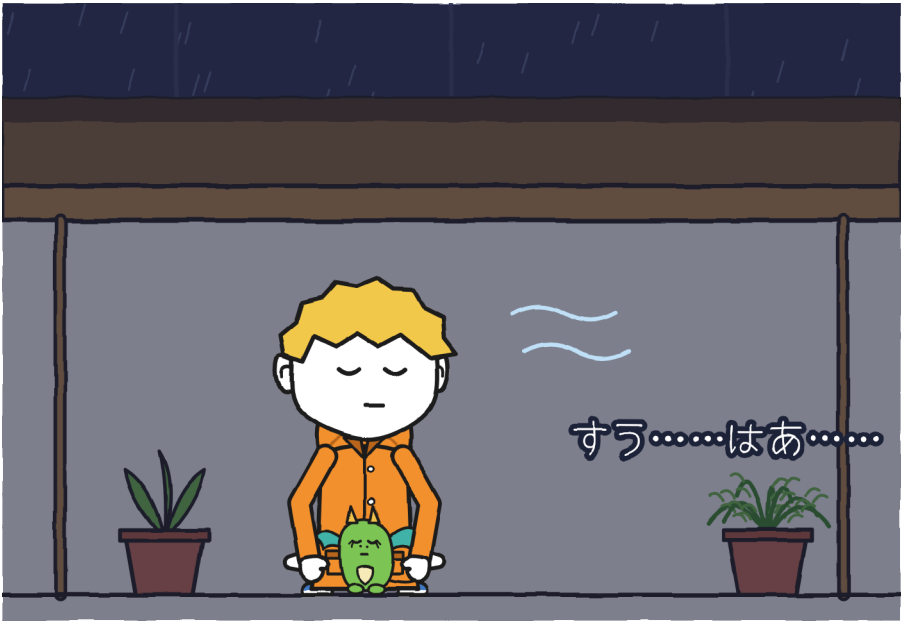
「わたしは、来ないものを待つのがこわい」とフローラさんは言った。「だから、これまでは、びんがとどくとすぐ、あけていたのよ」

わたしは、はし。それは知っていたでしょ。 —J.

だれもわらわなかった。

外は同じようにふりつづけていた。パンくずは、ぼくのレインコートにくっついたままだった。花だんの下で、ぼくはもうひとりじゃなかった。

ゆっくり、いきをした：板の橋のときみたいに。すう、はあ。パンくずも、いっしょにいきをした。ふるえがやんだとき、ぼくの手も、少しゆるんだ。




稲光（いなびかり）。ぼくたちはいっしょに九つ（ここの）まで数えた。ゴロゴロ。トニョはいすの上から、小声で「いちにさん」と言って、いつものとおり、三でとまった。カミナリは目をさましもしなかった。

そして、ヒックは出なかった。そのかみなりでも、次のでも。

ヒックを待ったけれど、来なかった。パンくずが首をかしげた。その夜はじめて、温室は、必要なだけのあいだ、くらかった。

「今！」とフローラさんがささやいた。

フリータは、つま先で、くらやみの中に入った。花だんの下にしゃがんでいたぼくの前を、運動ぐつが、ゆっくり、一足ずつ通った：温室のゆかが、板の橋であるかのように。びんをぬれた土の上に置いて、ふたをあけた。せんは小さなポンという音を立てた、あやまるような音で：台所のポン！とは、くらべものにならない。それから、音をたてず、走らず、足をぴたりと止めて、入り口にもどった。

今度は、びんは間に合うようにあけた。覚えておいて。 —J.

トト、トト、トト。くらやみの中で、何かがびんから出てきた。

何も見えなかった：聞こえるだけ。根の足が、ガラスをおりて、ぬれた土をふむ、七つの小さな音、一つずつ、雨より少しゆっくり。生まれてこれまでに聞いた、いちばん小さな音だと思う。そして、これほど注意して何かを聞いたことは、一度も

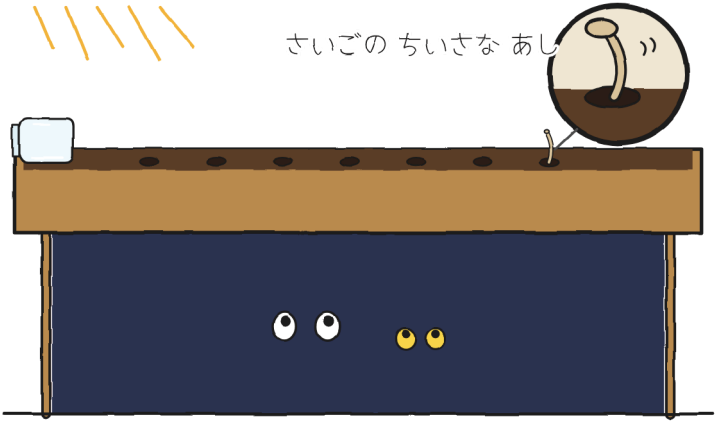
ない。二週間前の土曜日、パンくずのたまごのからが割れる音でも。

遠くで稲光。ぼくたちは声を出さずに、くちびるだけで数えた、入り口のフリータと、花だんの下のぼくで：ぞう1とう、2とう、3とう……7とう、8とう、9とう、10とう……ゴロゴロ。

10。もう一つ多かったら、七つは、次のあらしまで、土の上でねむってしまっていた。10は、間に合う最後の数だった。

次の稲光で、見えた：

びんはからで、花だんのはしにたおれていた。土には、七つの小さな穴が、笛の穴みたいに一列にならんでいて、いちばんおくの穴には、根の小さな足が、まだ入りきるところだった：いちばんさいごの足。



それからまたくらくなって、次の稲光のときには、小さな足はもうなかった。



それから、しばらく、何もなかった。ぼくたちだけ、くらやみの中で、土の花だんを見つめて。

フローラさんは、口の前で両手をあわせていた。トニョは、ねこのせいで、動かなかった。フリータも、めずらしく動かなかった。パンくずとぼくは、同時にいきをしていた。

そして、さいしょのが光った。

花だんのまん中に、小さなあかり、緑と金色で、ろうそくの火くらいで、それは土から出てきた。大きくなった。細い茎を、ストローをのぼるジュースみたいにのぼって、上で、丸くて、とじた花がひらいた。うすい紙のような、中に光の入った花。そのあと、二つめが光った。それから、順番には数えられなくなった：のこりが、ほとんど同時に光ったからだ、夜になって、通りの街灯がつくときみたいに。

七つのほおずき。どれにも、稲光のかけらが入っていた。



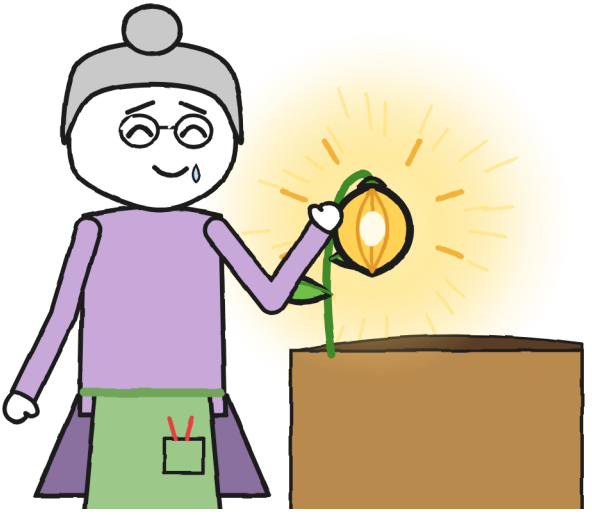
稲光の光じゃなかった。稲光は、温室ぜんたいを、一瞬だけ白くして、前よりもひどく暗くする。これは黄色で、少し緑がかっていて、そこにとどまった：じっとしている稲光、待つことをおぼえた稲光。ちょうどいいだけ照らした：土、茎、顔。両手を頭にのせたフローラさん。口をあけたまま、言うことが何もないフリータ。ねこをだいて、どうやってねこがここまで来たのかわからないトニョ。そして花だんの下から出てきたばかりの、パンくずとぼく。パンくずは、ぼくと同じように、口をあけて見ていた。もう、ぼくのこわさをまねしていない。これをまねしていた。

遠く、ずっと遠くで、また、かみなりが鳴った。フリータはくせで、小声で数えて、途中で数字を見うしなった。

フローラさんは、長いあいだ何も言わなかった。それから、花の一つに指の先で、ゆっくりふれた、ずっと待っていたものにふれるみたいに。

「うんが沿いの道は、こんなふうだった」と言った。

花に向かって言った。れいぞうこの写真にも、こんなあかりが、もう一つ、また一つと、板の橋までならんでいた。



フローラさんのメガネがくもった。泣いた、とは書かない。絵にはかく。それは別のことだ：フローラさんは泣く人じゃなくて、水をやる人だ。

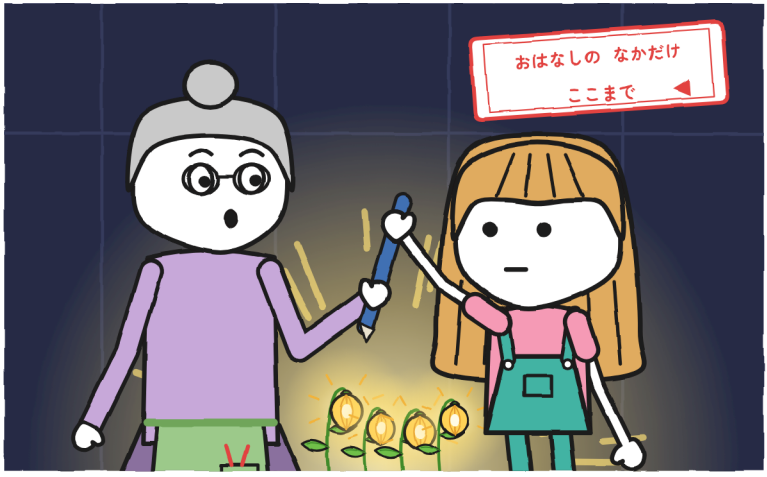
ぼくもさわった。パンくずも、前足で、そっと。あたたかかった、パンくずの巣にある、昼のあたたかさをためておく石みたいに。これは別のものをためていて、それも同じくらい上手（じょうず）にためていた。ところで、フローラさんのシダは、ぶじだった。

フローラさんはハンドルを回した。かいた水のつぶがまたのぼりはじめて、花だんに雨がふらなくなった。それから、その

場で、ほおずきの間で、サインをするためにペンを取り出した。

青いペンだった。消えるかどうか見る間もなかった：フリータの手が、もう上にあったから。

「まだ」とフリータは言って、フローラさんの手を止めた。「あと一つ。八つめ。わたしのせいで行ってしまった：びんを、早くあけたから」




フリータは、一日じゅう、このサインを待っていた。それを、指二本で、止めたところだった。

フローラさんは、ペンを宙（ちゅう）にうかせたままだった。それから、しまった。

「わかった」と言った。

ぼくたちは、一人ずつ台所にもどった、七つのほおずきをガラスのむこうに光らせたまま。台所で、フローラさんは、ぼくたちの前に立った：

「庭の戸は、しめたままだ。まだ出ないよ」

だれも言いかえさなかった。

フリータは、箱のラベルを、ゆっくり、やぶらないようにはがして、オーバーオールのポケットにしまった、かぎをしまう人みたいに。

とどけるなら、ぜんぶ。 —J.



台所で、フリータが数える稲光（いなびかり）がなくなるまで待った。

ぞう12とう。16とう。21とう、そしてもう、かみなりと呼（よ）べない音、二階上で家具を引きずるような音。それから、空が、雲のうしろで最後にもう一度光って、フリータは、ぞうがなくなるまで数えて、何も来なかった。まどに雨がふらなくなった。あらしは行ってしまった。それでも、フローラさんは、最後のかみなりから三十分、ぼくたちを中にとどめた。フリータ

のきまりで、そのときは、フリータが、歯をくいしばって守る番だった。

フローラさんは、うしろのドアをあけた。庭はぬれて静かで、石だたみが光り、雲のあいだに、星がいくつか、何があったのか見に出てくるみたいに。フリータは入り口に立って、ぼくがそのとなりに立った。

八つめは、まだ外にいた。フローラさんの家から、板の橋は見えない：道のかべがかくしていた。時間までに土が見つからなかったなら、もうただの石だ。雨が運河(うんが)に向かって流れ落ちるのを考えて、水を見るのをやめた。

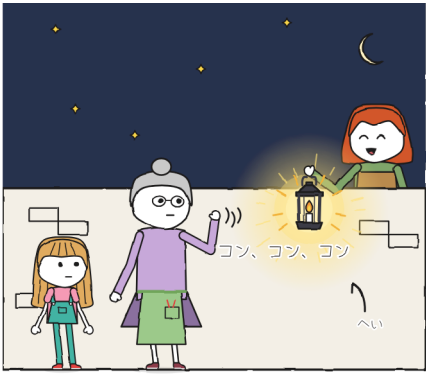
そしてもう一つ、いつものきまりが残っていた：フローラさんのサインがなければ、夜明けに、2番は、とんで棚(たな)にもどってしまう。日の出まで、時間があった。

「さがしに行こう」とフリータは言った。

フリータの手は、また、ドアノブにあった。今度は、ドアがあいていた。

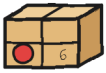
フローラさんは、夜を、長いあいだ見つめた。それから、庭のへい、ドラゴンの家のかべを、三回たたいた、ベラさんが

言っていたとおりに。コン、コン、コン。こぶしで、急がずに。




へいのむこうの上のほうで、ランタンのあかりがついた。

「今度は」と言った。「あなたたちだけじゃない」



第 6 章

# やっつめ

二人のおとなと、ランタン一つと、自転車一台で出かけた。その前に、フローラさんが、ぼくの家とフリータの家に電話した：「今夜、お返しします。二人だけにはしません」。

生まれてはじめての、リストつきのお出かけだった：

- ベラさん、ランタンを持って。
- フローラさん、ライトを持って。
- トニョ、自転車をおして、ダイナモで光らせて。
- フリータ、からのびんと、オーバーオールのポケットのラベルを持って。
- そしてぼく、レインコートの中にパンくずを入れて、頭だけ外に出して。

ベラさんは、へいをたたいて一分後に、通りから来た。赤い髪(かみ)がぬれていて、ランタンを高くかかげて。だれが何をなくしたのか聞かずに、ぼくたちの前に立った。

パンくずとぼくは、もうふるえていなかった。



庭を、小道を、運河(うんが)のふちを、さがした。

フローラさんは、石だたみをライトで調べた。トニョは、自転車をおして、縁石(えんせき)をたどった。フリータは、あたたかい石がないか、道の石をさわった。パンくずとぼくは、草むらの下を、一つずつ見た。何もなかった。

ねむったたねは、夜には、ただの石だ。そして散歩道には、石がものすごくたくさんある：その夜、フリータのとなりでひざをついて、わかった。どれも、ねむったたねに見えた。どれも、ちがった。

トニョは、配達のようにさがした：道ぜんぶを十分で、行って、帰って、そしてもう一度。

ランタンの光が、ぬれた石に反射(はんしゃ)して、きらきらしていた。そのとき、気づいた：さいたばかりのほおずきは、ほんの少し

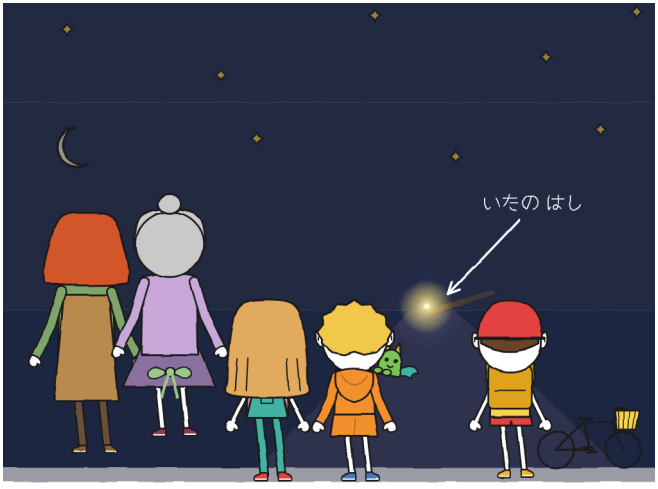
しか光らないだろう。ぼくたちは、三つのあかりをつけたまま、小さなあかりをさがしていた：のまれてしまう。

「全部消して！」とぼくは言った。

だれも理由を聞かなかった。トニョは急ブレーキをかけ、自転車のライトが消えた（イナズマ便は、決して止まらないのに）。ベラさんは、ランタンの火を、何もなくなるまで小さくした。フローラさんは、ライトを消した。しばらくのあいだ、道のどこにも、あかりがなかった。

そして、くらやみの中、道のおくに、小さなあかりが見えた。

板の橋のふもとだった。



フリータは、そこへ歩きだした。ほかのみんなは、あとにつづいた。

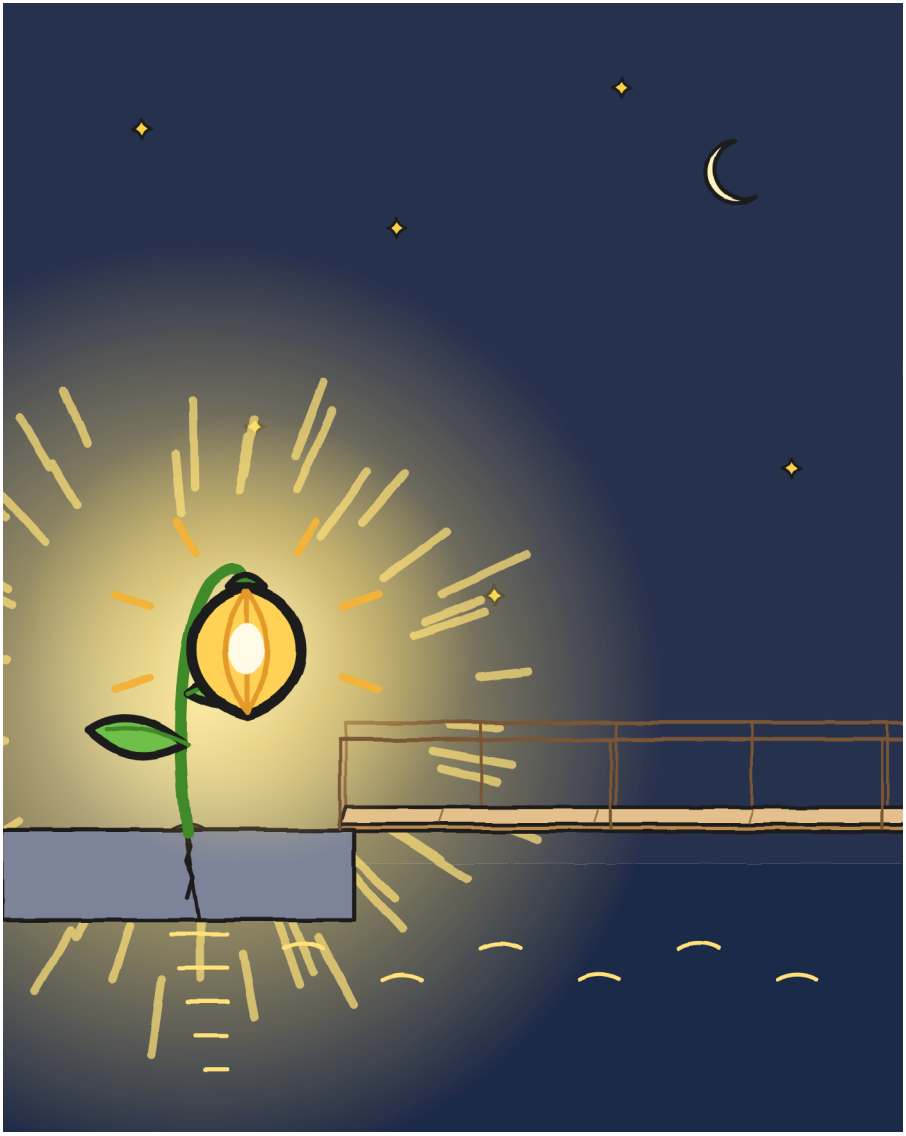
雨が、小道から道まで、たねをながしてきたのだ。そして、二つの石のあいだのひび割(わ)れ、いつも指一本ぶんの土と、だれも植えていない草があるようなところに、ひっかかった。そこで、ひとりで根づいた。遠くからは、小さなあかり。近くでは、ぜんぶを照らした。

茎(くき)はまがっていて、温室の七つと同じ光だった。板の橋のはじまりと、水のほんの一部を、照らしていた。

フリータは、板の橋を見つめた。あかりがあると、ちがって見えた：もっとみじかくて、もっと広くて、水より木のほうがずっと目立った。今度は、どこで終わるのか、見えた。

橋の板に、片足(かた)をのせた。一本だけ。それから、ひいた。一歩じゃなくて、ためしただけだったけれど、足は、八つめのあかりを下にして、少しのあいだ、しっかり立っていて、だれも何も言わなかった。ぼくは「わたって」と言わなかった：今度は、フリータには、道が見えていたから。

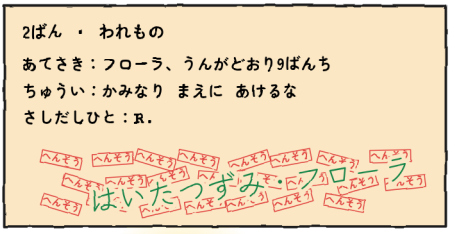
遠くからは、もうこわくない。近くでも、ほとんど。 —J.



「この子はここにのこる」とフローラさんは言った。「自分で場所をえらんだ」

フリータは、ラベルとみどりのペンを出した。フローラさんは、橋のふちにラベルをあてて、八つめの光でサインした。

二十三この「へんそう」のはんこの上に、みどりで、書かれた：はいたつずみ・フローラ。






別れのとき、玄関（げんかん）で、フローラさんがぼくにざるをくれた。

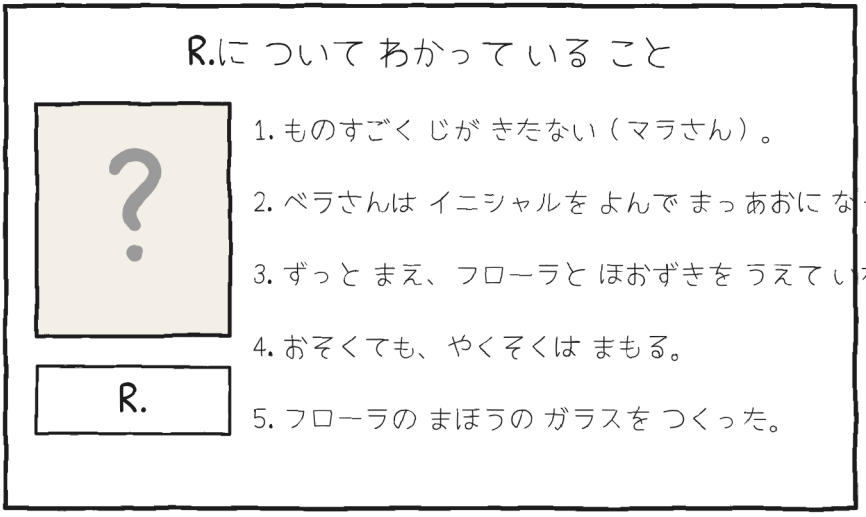
「持っておいき。次のあらしのために」

それから、つけ足した：

「マラに言っておいて。やっとだね、って」

ざるの持ち手をぼくに向けて、ほんもののヘルメットをわたすように。「もしまたあらしがあったら」とは言わなかった：「次の」と言った、次の土曜日と言うみたいに。今は、ぼくの部屋の窓のノブにかかっている、まだあけていない箱の上に。あの部屋でいちばんはじめの、どの箱にも入っていなかったもの。

ことづけについて、何も聞けなかった：聞く間もなく、フローラさんはドアをしめた。R.のカードは、こうなった：




6. だれも名前を言わない。それも手がかり。 —J.

ベラさんは、パンくずを巣にもどした、着く前にねむっていて、ぼくのしましまのセーターの上に。もう二週間前からそこにあって、今ではぼくより、パンくずのにおいがする。「はじめてのあらしだったのよ」と言って、あごまでかけてやった。口を少しあけてねむっていた、お母さんに言わせると、ぼくと同じで。あらしのことは、おぼえていないだろう。そのために、このノートがある。

それから、ベラさんはぼくたちを、バンで店まで送った、トニョの自転車をうしろにたおして、道路の橋を通って：大橋は、もう上がっていた。フリータは運河(うんが)がわの窓(まど)ぎわにすわって、橋のあいだじゅう、水をまっすぐに見つめていた：何かをさがしていた。そして見えた。いちばんおくの、板の橋のふもとに、ちっぽけな、あかりが一つ。何年もあかりのなかった運河(うんが)に、一つ。

店はくらかった。電気がないだけじゃなくて：看板(かんばん)まで、すっかりくらくて、見えるのは通りの街灯のおかげだけ。ベラさんは、ぼくたちを入り口で降(お)ろして、ドラゴンたちのところへもどった。あらしのあとは、ドラゴンたちはなかなかねむらない、と言って。マラさんは、カウンターにいなかった。

下にいた。

三人で、カウンターの上からのぞいた、フリータとトニョとぼく、一列で、あごを木のふちにのせて、そしてそこ、下のくぼみに、マラさんがいた：首までもうふにくるまり、みみあてをして、頭に小なべをのせて、そのうえに帽子(ぼうし)をのせて。マラさんは、こんなときでも帽子(ぼうし)はぬがないのだ。ゴムのカエルをだいていた。ぼくのカエル。だれのものでもなかったカエル。マラさんがなんのためにほしがったのか、わかった。

「もうすんだ？」とマラさんは聞いた。

その声には、聞きおぼえがあった。ベッドの下から話すときの、ぼくの声だった。

「とっくに」とフリータが言った。

マラさんは、そこにいたままだった：もうふ、みみあて、小なべ。

荷物は、二十三回運んだ。一度も、あらしの日はなかった。

その朝、マラさんは、もうカウンターのはしに、ぜんぶ用意していた：もうふ、みみあて、小なべ。ぼくは、それを見て、荷物を見つめていたのだ。

「ここでやること」ね。そう。 ―J.

フローラさんのことづけを、つたえた。

マラさんは、どのフローラかも、何の時間かも、何の「やっと」かも、聞かなかった。小なべをまゆげまで下げた、小なべをかぶったままで、顔が赤くなるのにいちばん近いことをして、その下に、もう使わなくなった笑顔が見えたような気がした：カウンターのうしろにかかっている、若い二人の魔女の古い写真、シールのはってあるあの写真の、笑顔だ。マラさんとフローラさんは知りあいで、二十三回の配達だけの仲じゃない。なぜかは知らない：別の土曜日のための質問リストに入れておく。リストは、もう二ページ目だ。

「ぼくもかみなりがこわい」と、マラさんに言った。

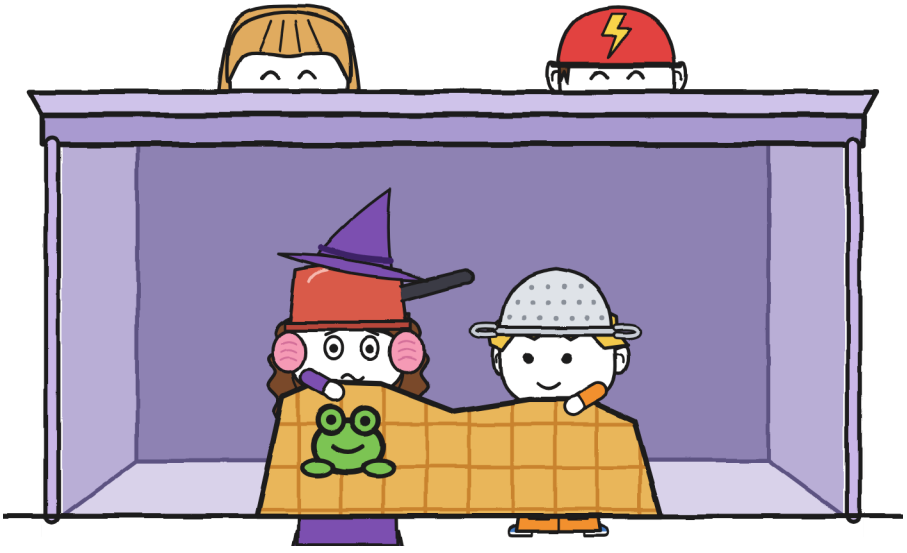
はじめて言ったとき、花だんの下で、あらし一つぶんかかった。二回目は、ひとりでに出た、ヒックみたいに。

マラさんは、何も言わなかった。もうふを、持ち上げた。

ぼくはざるをかぶった、フローラさんの玄関から、ずっとはなさなかったざるを。そのために、くれたのだから。そして、マラさんといっしょに、カウンターの下にもぐった。

ちょうど入れた。

マラさんには小なべ、ぼくにはざる。マラさんは、まだカエルをだいていた。カウンターの上に、フリータとトニョがのぞいていた。だれもわらわなかった。



マラさんの気持ちがおさまるまで、あるいはぼくの足がしびれるまで、そうしていた。同じことだ。マラさんが出てきて、電気をつけ、フリータが、はんこのとなりのカウンターにラベルを置いた：二十三の「へんそう」と、その上に、はいたつずみ・フローラ。マラさんは、さわらずに、長いあいだ読んだ、1番のラベルを読んだときと同じに。それからカウンターのは

しを見た、もうもうふのなくなった場所を。そして、箱をさがしに行った。

マラさんは、トニョに、配達用の箱を、スツールのとなりにさかさまに置いてやった。

「今のところは」とマラさんは言った。

マラさんの「今のところは」は、かなり長くつづくこともある。

トニョはすわった。箱は低くて、ひざがあごにつきそうだった。そこに、のこった。

フリータが、みどりのペンをわたした。

リュックの、「あらしのときはべつ」の後ろに、トニョは二つ言葉を足した：

「ねこも」。

今は、小さい字が本当のことを言っている。 —J.

それからフリータは、ぼくの青いスツール、いちばんかべに近いのにのって、ふだの19を消して、となりに、もっと大きな18を書いた、それも消したそうな勢い(いきお)で。




ぼくのプランを直した。かみなりのための：

1. ぞうを数える。
2. だれかといっしょに。
3. ヒックが出ても、だいじょうぶ。

そして、何かのハンターだと言わないこと。 —J.




しめるところだったとき、ベルが鳴った。

チリーン。

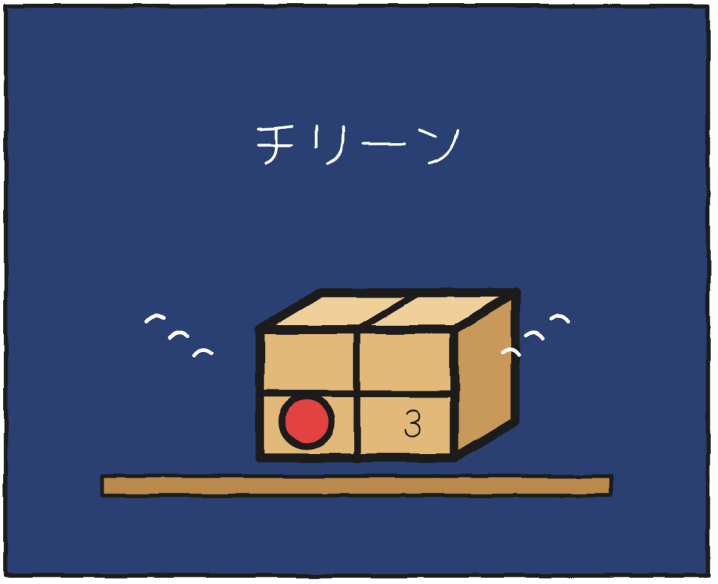
入り口からじゃなかった。「もどってきた荷物」の棚(たな)からだった：3番。二つのあいたところのとなり。

ラベルを読みに近づいた。

3番・トニョちゃんへ。

トニョの顔は、ヘルメットと同じ色になった。



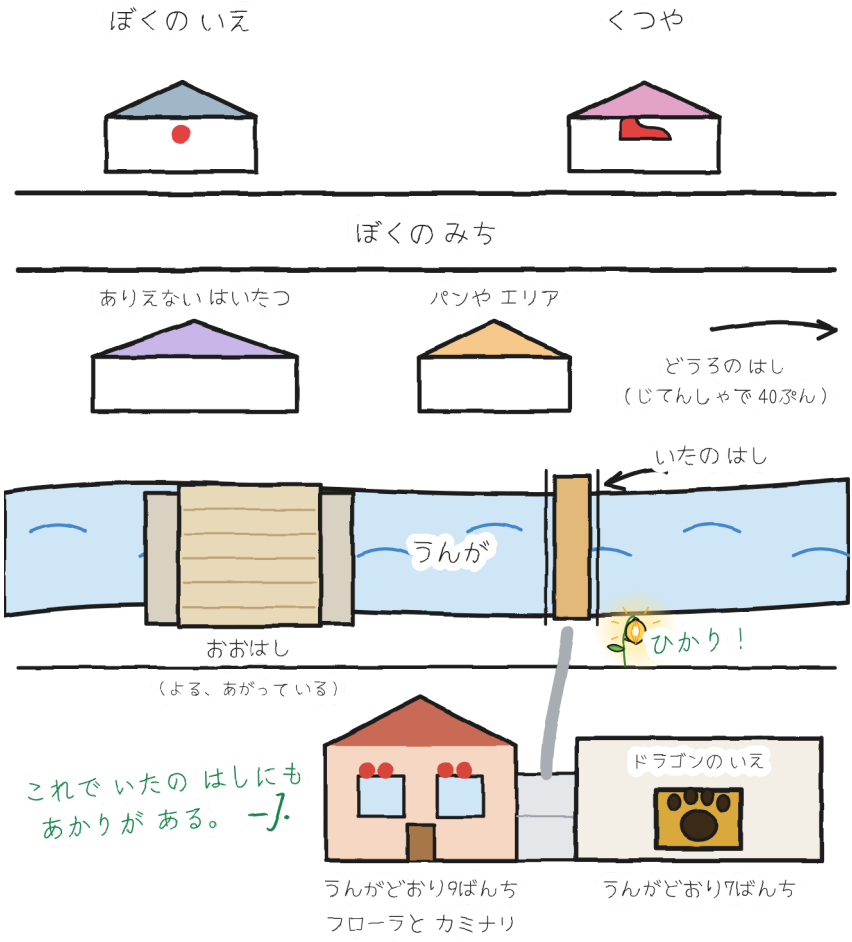



だれがトニョに荷物を送ってくるの？ —J.

ありえない はいたつ ・3

（もうすぐ）

# まちの ちず（バージョン2）



# ひとつの おはなし、六つの サイズ

この本には六つのサイズがある。3さいから16さいまでで、ことばは20いじょう。XXS、XS、S、M、Lは同じ絵で、物語を一ページずつ語り、サイズが上がるごとに、細かいところまで話すようになる。XLは小説だ。同じ物語に、グニが心の中で考えても口には出さないことのための場所がある。

CEFRのレベルは目安です。XXS：pre-A1・XS：A1・S：A2・M：B1・L：B2・XL：B2–C1。

みんな自分のサイズで。おなじあらし。 —J.

おうちの ひとと せんせいへ

linguaula.comで しょうごとに れんしゅう（Lサイズの練習問題つき）

## 本当の あらし：どうする？

1. かみなりが聞こえたら、遠くても家の中へ。かみなりはもう、あなたのところまで落ちてくるかもしれない。
2. おとなの人といっしょに中に入り、まど、ドア、ガラスからはなれる。温室、はし、木、水には近づかない。
3. さいごの かみなりから 三十分は 外に 出ない。
4. ぞうを数えると、かみなりが近いか遠いかがわかる。おちつくのにもいい。でも、いつ外に出ていいかはわからない。

### あなたの あらしを かぞえよう

いえの なかで：いなびかりから かみなりまで、ぞうを かぞえる。

| いなびかり | ぞう | キロメートル（3とうで1キロ、だいたい） | あの いなびかりは、なかい？ とおい？ |
|---|---|---|---|
| 1 | 15 | 5 | — |
| 2 | 9 | 3 | もっと ちかく |
| | | | |
| | | | |

かみなりでヒックが出る？ ぞうを数えよう。だれかといっしょに。 —J.